

---

# ごく普通の高校生の普通な非日常

瀬川しろう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ごく普通の高校生の普通な非日常

### 【Nコード】

N5003Q

### 【作者名】

瀬川しろつ

### 【あらすじ】

ごく普通の高校生、霧生晃平。

そんな彼のごく普通の日常の中に、非日常が現れる。  
主にエッチなイベント・・・。

（注）読むにつれてちょっとづつエッチくなります。

## 1 普通の高校生

僕の名前は霧生晃平。

普通に学校に通って、

普通に友達と話をして、

普通に授業を受けて、

普通に部活に行く高校2年生だ。

そんな僕には妹がいるんだ。結構見た目は可愛いんだけど、  
なんというか・・・、タチが悪いんだよな・・・。

地味なイヤガラセをしつくしてくるんだよ・・・。

例えば・・・

「どけ」

ゴスッ

「イテッ！」

「あ、ごめんね」

そして妹は去って行った・・・。

今のが僕の妹。 名前は霧生華音。

今みたいに、地味なイヤガラセをしてくるんだ・・・。

ちなみに今のは、足を蹴られたんだ。地味に痛いんだよなあ・・・コ  
レ。

おっと、そろそろ学校へ行かないとな。

学校へは、途中までは妹と学校へ行く。妹は中学2年生なので  
幸い同じ学校ではない。

だが、一緒にいる間はずっと、イヤガラセを受ける。

もう慣れたから、気にはしない。その分、妹と別れれば地獄から  
抜け出せたのと同じだからな！

「そんな妹がいて大変だな、霧生」

「まあな。・・・え？白瀬？いつの間に僕の隣にいたんだ？」

「たった今から」

僕の隣にいるのは白瀬浩太。僕の小学校からの親友だ。

それゆえ、スゲー話が合う。結構いいヤツなんだ、けど・・・。

こいつ、僕のことを極度のシスコンだと思ってるんだ・・・。なぜそう思われてるかは、

今後いつか話す。しかし、このパラメータは困る。

何せ、向こうは僕がシスコンという前提で話している訳だからな・・・。

それでもちゃんと話を聞いてくれるこいつを、

僕はスゲーいいヤツだと思ってる。

「あ、晃平！おはようー！」

「ああ、おはよう」

この元気のいい女子高生は、僕の幼馴染にして同じクラスの浅井夏菜。

こいつは、根はいいヤツなのだがちよつとタチが悪い。

というか、いたずら好きといったほうがいいかな・・・。

そして、夏菜はかなりのゲーマーなんだ。

何度負かされたことか・・・。

「ところで、一時間目は数学だけど、コンパス持って来た？」

「あ、やべ・・・忘れたかも・・・」

「ふっふっふ・・・、やはりか。しよーがない！今日は

たまたま2個持って来たから1個貸してあげてもいいけど？」

たまたまたあ？　ワザと2個持って来たクセに・・・。

でも、僕はこう言うしかないんだ。

「貸してください、夏菜さん」

「しよーがない！貸してあげよう！」

無性に腹がたつ・・・。まあ、根はいいヤツだからいいんだけど。

無事、1日を終えた。しかし、部活がない日は地獄へ戻るようなも

のだ。

まあ、それはいいとしてだな・・・。

いつも帰るときは僕、夏菜、白瀬の3人で帰っている。  
お馴染みの3人ってトコだな。

ちなみに、僕と白瀬が会話してるときに

一人称が僕なのが僕で、

一人称が俺なのが白瀬だ。覚えておくと、今後読みやすいぞ。

「というわけで、明日は霧生の家に集合だ」

「悪い白瀬、「というわけで」の意味が分からん」

「気にするな霧生。俺は気にしてない」

「僕が気にしてるんだ！」

「まあまあ、いいじゃん、晃平。人間が小さいぞ！

せつかく、勉強教えてあげようとしてるんだからっ！」

「そっだそうだ！」

「分かった分かった。検討しておくよ」

僕的にはべつにかまわないんだ。でも、妹がなあ・・・。

～翌日～

「あゝあ・・・、眠い・・・。あ、そういえば

あいつらが来るんだっけ・・・。華音に聞いておくか・・・」

「あ、おはよ。お兄ちゃん」

「ああ、おはよう・・・」

「突然で悪いんだけど、今日、私の友達が来るんだ。

だから、ちょっとだけ消えててくれない？」

まじか・・・。てか、「消えててくれない？」って・・・。

こうなったら仕方ないけど・・・。

「で、こうやってたそがれてるわけか」

「そっいうことだな」

今、家の前でたそがれている。と、そこへ

「なにやってんの・・・？」

「たそがれてる」

「意味が分かんないんだけど・・・？」

「家、入れないの？」

「うん」

「勉強はどうするのよ？」

「さあ。あと、語尾を伸ばすな」

「はいはい」

「じゃあ、俺ん家に来るか？」

「白瀬ん家？」

そういえば・・・、白瀬の家には言ったことがないな・・・。  
行ってみてもいいかもな。

「じゃ、そうするか」

「よし、俺ん家はこっちだ！」

## 2 普通の女の子

そんなわけで、白瀬の家へやってきた僕たち。

「なんか地味」

夏菜、そーゆうのは心のなかでつぶやけ。 僕みたいに。

しかし、こいつの部屋には来たことないからな。僕も少し興味ある。

「そうそう、俺、新しいゲーム買ったんだ。今からやろうぜ!」

「勉強はどうした」

「いいじゃん、べつに。やろやろっ」

夏菜がやるきになってしまったか。。。もう止められんぞ、これは。。。

というか、夏菜はゲーマーなんだから、勝負したところで夏菜が勝つに決まってるだろ。。。

「あつ、汚えぞ浅井!」

「油断するほうが悪いのよっ!」

僕抜きでやってるし。。。、しゃあない。。。

この家の見学でもするかな。。。

えーと、白瀬の部屋を出ると、右に玄関。左に階段があるな。

すると、階段の上から一人の女の子が降りてきた。

「。。。あ」

「こんにちは」

「あ、ああ。。。こんにちは。。。」

結構、可愛い子だったな。。。

。。。あれ? 白瀬って妹とかいたっけ?

僕は白瀬に聞いてみた。

「なあ白瀬、お前、妹居んの?」

「はあ? いねえよ、ちよつと話しかけるな!」

ゲームに夢中かよ。。。ちなみにスコアは576と4925だ。どっちがどっちのスコアかは僕の話聞いてれば分かると思う。

「でも、さつき女の子がいたんだけど・・・？」

「え？ああ、その子は俺のいとこだよ」

「いとこ？」

「ああ、土日の間は時々遊びにくるんだよ。結構、可愛いだろ？」  
うむ・・・、それは確かに。

「あつ、話しかけるから負けたじゃねえかよお！」

いや、多分話しかけなくてもお前は負けてたぞ・・・。

「白瀬、トイレどこ？」

「部屋を出て、真正面のドア」

近いな・・・。

トイレに行くために部屋を出る。すると、またさつきの

女の子が降りてきた。下手するとスカートの中が見えそつだな・・・。

「あ、さつきはどうも・・・」

「どーも。君、白瀬のいところしいね」

「はい、神木美保です。よろしくお願いします」

「うん、僕は霧生晃平。よろしく」

「霧生・・・？」

「・・・どうかした？」

「いえ・・・、同じ苗字の友達がいたので・・・」

「・・・ん？ 同じ苗字・・・だと・・・？」

「もしかして・・・中学２年生だったりする・・・？」

「は、はい。どうしてわかつたんです？」

「何でもないよ。じゃ、またね」

「・・・まさか・・・」

「白瀬、お前のいとこって、どこの中学かわかるか？」

「え？うーん・・・、確か・・・、お前の妹と同じじゃなかったかな・・・」

「やはりか・・・、華音の友達かよ・・・」

美保・・・ちゃんだっけ・・・。どこかへ行くような格好してたけど、

あれは今日、ウチへ来る華音の友達の１人だな・・・。

でも、可愛い子だったな。仲良くなっておいて損はなかったな。

「おい、霧生」

「ん？」

「浅井・・・強くな？」

「うん、強いよ」

「知ってるなら言おうよ・・・」

「それが僕という人間なんだ。仕方ないだろ」

「ねえ、そろそろ勉強しようよ」

それがいいな。勉強が目的で集まったんだし。

それから約2時間くらい、勉強して白瀬の家を後にした。

「あそここの方程式がわかんねーな・・・」

「あゝ、あそこはね・・・」

と、その時。さきほどの少女が。

「あ・・・さつきはどうも」

「ああ、えっと・・・美保・・・ちゃんだっけ」

「はい。華音から聞きました。やっぱりご兄弟だったんですね」

「まあな」

「えと、そちらの方は・・・？」

目線をたどると、夏菜がいた。

「ああ、こいつは僕の幼馴染の浅井夏菜だ」

「そうなんですか。はじめまして、神木美保です」

「え、は、はじめまして・・・」

。なんか、こいつがまともな挨拶をするの、初めて見た気がするな・・・。

家に着いた。

今日は華音にいろいろ聞くか・・・。

「ただいま・・・」

バチィンッ！

「痛つてえ！」

「よっしゃ！首取つたり！」

どこの戦国武将だ、お前は。畜生・・・、輪ゴムか・・・。

何らかの仕掛けで輪ゴムが発射されるようになってたらしい・・・。  
昔からこういう才能だけはあるんだよな・・・。

「お帰りお兄ちゃん、そしてザマーミロ」

接続の仕方がおかしいぞ、お前。

「美保から聞いたんだけど。お兄ちゃん、美保の知り合いだったんだ」

「知り合いというか、さつき白瀬ん家で知り合ったんだよ」

「ふうん、なんでわざわざあんな家で遊んだの？」

あんな家ってお前・・・。

「それと、ジューズ買いに行くからどいて。蹴るぞ」

「あー、はいはい。どーぞ」

結局蹴るのか。蹴るしか攻撃手段がないのか、こいつは。

くその夜く

とりあえず、今日会った子は可愛かったな・・・。

服の露出度が比較的に高かったなあ・・・。

それより、明日は日曜日か・・・。

また、あいつらが来るんだよな・・・。

華音にも聞いておかないとだな。

### 3 普通の友達

さて、今日はまたあいつらがこの家に来る。  
そのためには・・・

「あのさ、華音・・・。今日、僕の友達が来るんだけどいいか？」  
「ん？別にいいんじゃない？」

思ったよりあっさりだった・・・。

「あ、それと。私の友達も来るから」  
「なに！？」

「知ってるでしょ？美保」

ああ、あの子か・・・。あの子なら、まあ、いいか・・・。  
結構可愛いしな。

華音も可愛いだろって？いくら可愛くても、妹は妹さ。

「あ、それと。私、今から買い物に行くてくるから」

「はいはい、いつてらっしゃい」

「ほい、来たぞ」

「チッ、来やがったか・・・」

「出会い頭に舌打ちされた！？」

「ん、ああ、気にするな」

「私は気にしてないよ！」

だろうな。お前は能天気だからな。

「さて・・・」

「リベンジだ！浅井！」

「おう、かかってこいつ」

ゲームッスか？いきなり？勉強は？

ピンポン

「ん？誰だ？」

「おい、霧生。誰か来たぞ、出てみるよ」  
何様だ、お前は。

ガチャ

「あ、こんにちは・・・」

「えつと・・・、美保ちゃんか」

「はい、華音いますか・・・？」

「ああ、入りなよ」

「おじゃまします」

・・・あれ・・・？　そういえば、華音のヤツ。

買い物に行くとか言ってたよな・・・。

じゃ、今は僕と美保と2人きりってわけか・・・。

しかし、美保のヤツは今日も結構、露出の多い服を着てるな・・・。

まあ、半そでのシャツにミニスカートという一般的な服装なのだが、やはり妹よりは興味あるな・・・。

「いつもそういう格好してるの？」

「あ、はい。こういう服装が気に入ってるので・・・」

まあ、夏でも涼しいしね。

「冬でもそういう服なのか？」

「冬ですか・・・？　冬は、長袖とか、コートとかにミニスカートを合わせてます」

冬でもミニスカートなのか！？

うーむ、なんというか・・・。

露出の多いほうがいいんだろうか、この子は・・・。

しかし、さっきから気になっているんだよな・・・。

だって、この服装でソファに座って、向かい合わせになっていると・・・、

どうしても脚に目が行くんだ。まあ、そこはいいとしよう。

問題なのは、その脚の奥をたどっていつてしまうと、

太ももの向こう側の白い下着がチロツと見えてしまうことだ。  
極力みないようにしているのだが、どうしても目が行ってしまう。  
逃げ場のないそんな状況のなか、  
ようやく華音が帰ってきて、その場から開放された。

「どうした霧生？少し疲れ目になってないか？」

「ああ・・・、対応に困った・・・」

「よっぽど手間のかかる客だったんだな」

そういう意味では手間がかかったな・・・。

しかも相手が年下だったから、なお困った・・・。

ちなみに、ゲームのスコアは 8592対38719 だった。

夏菜の圧勝。

そつえば、夏菜はあーいう格好しないよな・・・。

まあ、あいつは元気がいいのがとりえだし、いいんだけどな。

結局、勉強はしないままだった・・・。

何のために来たんだ？ あいつらは・・・。

「お前の友達・・・、疲れるな」

「あー、お兄ちゃんも餌食になったの？」

餌食？

「美保がいつもミニスカートはいてるのって、

パンツ見せたときの男の反応でその人の事がよくわかるからって  
言ってたよ」

ほー、そりゃすごい確かめ方だねえ・・・

「だから、学校の男子がよく美保のパンツの色の話をしてるんだ」  
なんだ、その学校。

よーするに僕はハメられたってことか・・・。

「で？何色だったの？」

「な、何でそんなこと聞くんだよ？」

「なんか、白をはいてるときは、そういう検査的なのはやってないときだって

いってたから」

・・・、じゃあ僕はハメられたわけじゃないのか・・・。

よく考えたら、華音と遊ぶのが目的でウチへ来たんだもん・・・。

そりゃそうか。

「そろそろ部活に行かないとだな」

「そうだな、霧生」

「ところで、なんで僕たちはこの部にいるんだ？」

「それは・・・、あの人にさそわれたからだろ」

「ちがうな・・・、あいつに引きずり込まれたんだ・・・」

「あ、いた！晃平、白瀬くん！」

次回はそんな部活の話を紹介しよう。

### 3 普通の友達（後書き）

#### キャラ紹介

1、霧生晃平 17歳 男

ジョブ 主人公

血液型 A型

2、霧生華音 14歳 女

ジョブ 生意気な妹

血液型 O型

スリーサイズ 78 - 56 - 80

## 4 普通の部活

さて、僕はある部活にはいつている・・・。

何の部活かって？

それは、ゲーム研究部だ！

いや、この部には自らの意思で入ったわけじゃあないんだ。  
あいつに引きずり込まれたんだよ・・・。

浅井夏菜 高校2年生、同級生にして僕の幼馴染。

こいつに引きずり込まれたのさ。

夏菜に引きずり込まれたのは僕だけじゃない。

白瀬浩太 高校2年生、僕の小学校からの親友。

そつ、白瀬も夏菜の被害者なのだ。でもまあ、正直この部活は嫌  
いじゃないんだ。

ゲームを研究するのは楽しいし、ゲームを作るのも好きだし、  
夏菜や白瀬と一緒にいられるし、なにより、  
妹と一緒にいなければならない時間が減る！  
これが1番の理由かな。

霧生華音 中学2年生、僕のタチが悪い妹。 見た目は可愛い。

まあ、華音の話はまた今度するでしょう。

「晃平、私の次回作、気にならない？」

「どんなのだ？」

「えゝ、聞きたいのぉ？」

お前が振ってきたんだろ、ボケ。

「まあ、聞かせてあげてもいいよ」

「結構だ」

おつと、言い忘れてたな。僕たちがいるゲーム研究部では、毎年一回、ゲームソフトを作るんだ。

僕たちは高2だから、二回目ってわけ。

「白瀬、お前はどんなのにするんだ？」

「いやー、さっぱりアイデアが思いつかん・・・」

「お前もか・・・」

と、その時。ゲー研の部室の扉が開いた。  
ガラッ

「どーだ、やってるか？」

なんだ部長か。

狩村孝弘さん 高校3年生、ゲーム研究部の部長。

ちなみに、この人はあまりゲームの知識がないらしい。

「狩村さん、いいアイデアが思いつかないんですけど」

「そんなこと俺に言われても・・・」

まあ、そうツスよね。

「あ、ぶちよー！私の次回作、気になりませんか？気になりますよね！なら、見せてあげます！はいはい、こちらへどうぞー！」

「え？え？ええ？」

部長が捕まったか。かわいそうだけど、しばらく夏菜に付きあつてもらおう。

「野球のゲームにするかな」

「いいんじゃないか？」

「お、やっぱり？俺もいいと思ってたんだよね！」  
「あーそうかよ」

（2時間後）

「思いつかん！」

「最初の威勢はどうした」

「無くなった」

そんなにハッキリ言われるとアレだな・・・。

あ、部長だ。

「なんだ、まだ出来上がってないのか」

「はい」

「んー・・・じゃあ、次の土日で仕上げてこい」

「わかりましたー」

「じゃ、霧生ん家な！」

「じゃ じゃねえよ！お前ん家でもいいだろ？」

「だめだ」

「なんで？」

「親がうるさいんだ」

小学生みたいな理由だ。そういえば、小学校のころはそんな理由で、遊びにいけなかったんだっけ・・・。

「じゃ、晃平の家に集合！あ、土日ね」

「もう勝手にしろ・・・」

また、来るのか・・・。 あいつら最近、僕の家にくるなあ・・・。

ガチャ

「ただいま」

そう言つて、ゆっくりと靴を脱ぐ。

ん？ この靴・・・華音の靴じゃないな・・・。

誰か来てるのか・・・？

「ただいま」

「あ、お兄ちゃんおかえり」

「靴があつたけど、誰か来てるのか？」

「あ、今日、美保が泊まりに来てるから」

「・・・ええええええっ！？」

「ほら、明日土曜日じゃん？だから泊まりなよって言ったの。  
で、今は買い物に行ってる」

泊まるだど・・・？

なんか、最近美保もウチに来るな・・・。

いや、それまでは僕が気づいてなかったただけなのかもな。

しかし、美保が泊まることによつて、確実に・・・。

「あの」イベントがある・・・。

神木美保 中学2年生、タチの悪い妹の、優しい友達。

ピンポーン

「あ、帰つて来た」

「早っ」

ガチャ

「ただいまー」

「おかえりー、入って入って」

「おじゃまします」

あいつ、友達には礼儀正しいんだな。

「あ、お兄さん。こんばんは」

「ああ、こんばんは」

「約2時間後 リビングにて」

うーむ・・・、日常に家族以外の異性がいるだけでこんなにもちがうとは・・・。

「華音、僕は風呂に入りたいんだけど、いいか？」

「え、お風呂？・・・いいんじゃない？」

？

変なヤツだな・・・。急に笑いやがって・・・。

そういえば、美保はどこへ行ったんだ？

ま、いいか。

この時、冷静に考えていれば、この後の展開は防げたはずだった。華音が笑った理由も、美保がいない理由も・・・。

ガラッ

「え・・・」

「！！！！！！」

風呂場の扉を開けると、

今まさに風呂に入るであろう、一糸まとわぬ姿の美保が立っていた。

・・・一糸まとわぬ姿ってわかるか？

ようは何も着ていない、つまり裸。

僕は妹の同級生のヌードを目撃してしまったというわけだ・・・。

頭のテッペンから、脚の先までバッチリと・・・だ。

畜生、華音のヤツめ・・・、美保が風呂場にいるの知ってやがったな・・・。

しかも、中学生だろ。

女子中学生の体って、やっぱりそれなりに成長してるだろ・・・？

・・・どこがどう成長してるかは言わないが・・・。

さすがに女子中学生だ、いきなり扉をあけられて驚き、そしていきなり裸を目撃されたので、赤面して黙り込んでいる。

正直、僕もどうしたらいいかわからない・・・。

全裸で赤面している少女に、なんて声をかければいいのか・・・。

「と、とりあえず、風呂はいれよ」

「・・・・・・はい」

美保は浴場の扉をあけ、入っていった。

・・・・華音、後で殺す・・・・。

美保が風呂から上がった後、僕は謝った。

「さ、さっきは悪かったな・・・。ワザとじゃないんだ・・・、その・・・」

「大丈夫ですよ、気にしてませんから」と、言って彼女は微笑んだ。

どうやら本当に気にしていないらしい。　なんとなく、そんな気がした。

くそ・・・、よくよく考えればアレだったなあ・・・。

入る前に冷静に考えれば、あんなことにはならなかったし、裸を見るなら見るで、堂々と見ればよかった・・・。

まあ、後の半分冗談だけどね。

だが、女子中学生の裸を覗いたというレッテルを貼られたのは違うないな・・・。

くそお・・・・。

これでハッキリした。

華音はタチが悪い。

なんか、また同じようなイベントが起きそうな気がするのには気のせいかな・・・。

しかし、明日はあいつらが来るんだよね？

マズイことになったなあ・・・。

#### 4 普通の部活（後書き）

3、浅井夏菜 17歳 女

ジョブ 幼馴染み

血液型 O型

スリーサイズ 86 - 58 - 85

## 5 普通の覗き（前書き）

晃平「なんか最近、お色気的なイベントが増えたな・・・」

美保「はい・・・」

## 5 普通の覗き

あの覗き事件の翌日、僕の家集合してゲームの設定資料を  
考えることになっていた。

しかし、それは午後。

午前中は華音、美保と一緒にいることになる。

「お兄ちゃん、昨日はマズかったんじゃない？」

「やかましい！お前が風呂に行ってもいいんじゃないかって言った  
んだろ！」

「いや・・・、まさか全裸だとは思わなくて・・・」

「全裸じゃなかったらいいとも思っていたのか」

「いいでしょ」

「よくない！」

さて、あいかわらず美保の服装は半袖のシャツにミニスカートだ。

食事中は箸を絶対に落としてはいけないんだ。

なぜかって？ 分かるだろ・・・。

箸をとるためにかがめば、美保の太ももの間から・・・下着が見え  
てしまうからだ。

まあ、幼稚園児じゃあるまいし。 箸を落とすなんてことはないん  
だけだね。

「お兄ちゃん、午後はどこに行くの？」

「いや。何でだ？」

「別に。私たち、午後もここににいるから」

「・・・えええ？」

お前ら、どつか行くんじゃないのかよ！

マジかよ・・・。 午後もこいつら居るのか・・・。

まあ、夏菜や白瀬と何かしてりゃ、問題ないだろう。

（午後）

「ほい、来たぞ」

「よく来てくれたな！ ささ、上がれ上がれ！」

「な、何か前回と対応が違いすぎるぞ……。罨でも仕掛けてんのか・  
・・？」

「お前らは救世主だ！」

「おー、そこまでほめられると来た甲斐があつたわ」  
夏菜ですら女神に見えてきたよ。

「さて、霧生。お前はどんなのにするんだ？」

「うーん、まだ考えてないな」

「マジか。俺は昨日、一晩考えたぜ」

僕は昨日考える余裕はなかったよ・・。

「とりあえずゲームやろ！」

夏菜さん、いい加減ちゃんとしましょうよ・・。

「よし、リベンジだ！」

おーい・・。

「霧生、飲み物くれ。あ、ジュースでいいぞ」

「ハハ・・。」

「晃平、私はがつつかないからケーキでいいよ」

日本語がおかしいツスよ、夏菜さん。

「はいはい、持ってきますよ」

「早くしろよな」

「だまつとれ、貴様！」

階段を降り、台所へ向かう。

そして、一階の扉を開けた。

ガチャ

「え・・・」

「え!？」

似たようなシーンがあつたな・・・。

さて、状況が分からない人に説明をしよう。

扉を開けると、なんと下着姿の美保が着替えをしているところだつたのだ。

白い肌色の美保の身体が、ピンク色の下着に包まれている。

・・・ていうか、なんで美保は着替えているんだ!？

恐る恐る聞いてみた。

美保は赤面して答えた。

「あ、あの、華音が、買い物に行くから、出かける格好に着替えててつていつたので・・・。

その、着替えを・・・」

「な、なんつーありがちなお色気イベントだ・・・」

しかし、過ぎたことはもう仕方が無い。

僕がここへきたのは、ジュースやケーキを二階へ持っていくためだ。ジュースとケーキを持って、二階へ戻ろう。

「悪かったな・・・、覗くつもりはなかったんだ。気にしないでくれ・・・」

「は、はい・・・」

とりあえず、一件落着・・・かな？

「ほら、持って来たぞ」

「おう。あれ？短い間に少しやつれたか？」

「ま、まあな・・・。 厳しい戦いだつた・・・」

「そ、そうなのか？こつちも激しい戦いだつたぜ」

いやいや、ゲームの話だろ。

というか、夏菜が相手じゃ白熱のバトルなんてできないだろ。

「じゃあ、勉強しよつか」

「夏菜、その心意気は良いんだけど、今日はゲームの設定資料を作るのが」

「目的だから」

「・・・！ ま、まさか・・・！」

「霧生、どんなのにするんだ？」

「夏菜はスルーかい。 まあ、ここはスルーが吉だろうけど。」

「白瀬はどうするんだよ？」

「俺か？俺は・・・、そうだな。野球のゲームとかいいな。」

「自分で選手とかチームとか作れるヤツ」

「まあ、そういうよくありがちなゲームの方がやりやすいからな。僕もそういう、育成ゲーム的なものは結構好きだ。」

「よし、何とか出来上がった。」

「ふう、疲れたな」

「でも、ちゃんとできたからいいんじゃないか？」

「そうだな」

「じゃ、そろそろおいとましようか」

「二人は設定資料をもって、帰っていった。」

「おじゃましましたーっ」

「おう」

ガチャリ

帰ったか。

「あんなのが友達だと大変ね」

「まあな。・・・って、華音？ いつからいた？」

「たった今から」

「気配を感じなかった・・・。 こいつ、できる・・・！」

「美保は帰ったのか？」

「あの2人が帰るずっと前に帰った」

「そうか・・・」

「・・・何？美保と何かあったの？」

「え？美保から聞いてないのか？」

「何を？」

美保のヤツ、華音に話してないのか、覗きのこと・・・。

「ねえ、何をー？」

「なんでもない、気にすんな」

さて、明日からまた学校だな。

そういえば、もうすぐ夏休みか・・・。

今年も夏菜や白瀬と遊んで終わるんだろうな・・・。

「・・・寝よ」

しかし、今年の夏休みはそんなことでは終わらなかった。

## 5 普通の覗き（後書き）

4、白瀬浩太 17歳 男

ジョブ 小学校からの親友

血液型 B型

## 6 普通の試験勉強

さて、もうすぐ夏休みなわけだが・・・。

その前に・・・。

「期末テストかぁー・・・、やだなぁ・・・」

「まったくだなー、白瀬」

「おーおー、落ち込んでいる男子諸君！」

夏菜か。まったくさわがしい。

「期末テストなんてくそ喰らえよ！私は相手にしてないわ！」

お前は普段から勉強してるからな・・・。

「そつだ霧生。たしかに期末テストは地獄だ・・・。」

「あたりめえだ」

「だが、その期末テストを乗り越えれば楽しい夏休みが待っているぞ！」

・・・なるほど。

「と、いうわけで。霧生ん家に集合な」

「また僕の家かよ！ていうか、いつも勉強しないだろ」

「まてまて、今回は本気だぞ」

できればこれまでも本気でいてほしかったな。

「でも、さすがにもうウチは無理だ。夏休みに僕の家であそびたければあきらめろ」

「はぁ・・・。仕方が無い、また俺ん家に来るか？」

「そのほうがいいな」

「そうしょっか」

「じゃ、土曜日に俺ん家に来てくれ」

ふう、今回はウチじゃなくて済みそうだな。

家にいたら、またあんなことが起こりかねないしな。

「次の日」

「さて、行くか」

「あれ、お兄ちゃん。どっか行くの？」

「ああ、まあな。お前は出かけたりしないのか？」

「はあ？もうすぐ期末試験なのに、遊びにいくわけないじゃん」

「・・・そうか、中学校も期末テストがあるのか。」

「・・・ということは・・・あのトラブルメーカーも・・・。」

「着いた！」

「白瀬ん家に着いただけでそんなにはしゃぐな」

「よ、白瀬」

「意外に早かったな。まあ、入れ」

「あ、白瀬」

「ん？」

「お前のいところ、今日もいるのか？」

「ああ、いるぞ。もうすぐ期末なのにいいのかって聞いたたら、  
ここの方が落ち着くからここで勉強するっていったからな」

「そうか・・・、いるのか・・・」

「ま、まあいい。美保と関わらなければいいだけの事だ。」

「ここは、ここが√2だとすると、5xに当てはまるわけだから・・・」

「ああ、なるほど。浅井は頭いいな」

「いやー、そんなに褒められると照れちゃうなー」

「やれやれ、今日はちゃんと勉強できそうだな。」

「さて、僕も勉強を始めようかな・・・。」

「あ、霧生。リビングに問題集があるから、取ってきてくれないか？」

「自分で行け！」

「なぜキレル！？」

リビングに行ったら美保と会っちまうだろーが。

美保とはあまり関わりあいになりたくないんだよ。

「しょうがないから自分で取ってきましたあ」

僕が命令したみたいなき感じになるから、そんな言い方はやめろ。

「美保のヤツ、ちゃんと勉強してたよ。偉いな、親の顔が見てみたい」

白瀬、それは悪いことをしたときに使う言葉だ。

「美保ちゃんって、白瀬くんのいとこなんでしょ？ 可愛いね」

「やっぱりそう思う？ みんなそう言うんだよ」

「お前と美保・ちゃんって、仲いいのか？」

「まあな。美保が小さい頃から遊んだりしてたから、あいつは妹みたいな感じだな」

確かに、美保みたいな妹ならいいよな・・・。 純粹な子だし。

華音と比べると圧倒的だ。

「終わったあ！」

「テストは月曜日だったな。明日はさらに勉強しないと」

「明日は各自で勉強だな」

「さらに次の日」

うーむ、この方程式ってどうやって解くんだっけ・・・。

昨日、もうちょっと詳しく聞いときゃ良かったな。

ピンポン

「ん？ 誰だ？」

ガチャ

「よお霧生」

「帰れクズ、今すぐ帰れ」

「まあ待て、話を聞けって」

今日は各自で勉強って言ったじゃないか。

「どーしても分かんないところがあつて、教えてくれ」

電話とかで聞けばいいのに、わざわざウチに来たのか。

「よし、見せてみる」

「これだ、この問2の？」

・・・、

・・・、

・・・、

さつつつぱり分からん！ ていうか、これ、僕も分かんないところだ。

・・・いた仕方が無い。

夏菜を呼ぶか・・・。

「呼ばれて飛び出てジャジャジャーン！」

「別にくしゃみはしてないぞ」

「呼ばれたから来たのに。 で、どこがわかんないの？」

「僕じゃないぞ、白瀬だ」

「あ、貴様！ 自分だって分かんなかったクセに！」

何のことやら。 やめてほしいね、そんな根も葉もないこと言つのは。

↓それから約30分後↓

「で、ここは  $3 \times \pm \sqrt{26}$  となるわけ」

「おおー、さすが浅井！」

「いやー、えへへ」

問題が解けたのはいいとして、結局3人集まっちゃったな。

このまま帰らせるのは図々しい気がしたので、家に上げて約2時間勉強し、お開きとなった。



1週間後、テストの結果が返ってきた。

結果はどうだったかって？ 聞くな。

しかし、これからは夏休みを満喫できるぞ！

もちろん、今年の夏休みが普通に終わるわけがなかった・・・。

## 6 普通の試験勉強（後書き）

5、神木美保 14歳 女

ジョブ 妹の同級生

血液型 AB型

スリーサイズ 78 - 54 - 80

晃平「次回は結構な長編だぞ」

## 7 普通の夏休み（前書き）

晃平「今回はいつもより長編だぞ！  
新キャラも登場！」

## 7 普通の夏休み

終業式が終わる・・・。

「終わったあ！ 今から夏休みだあっ！」

「はしやぎすぎだぞ、お前ら」

「晃平は不機嫌そうだねー」

当たり前だ。予想をはるかに超える量の宿題出しやがって。恨むぞ、担任！

「なあ霧生、お前は、夏休みに何するんだ？」

「そうだなあ・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ま、まあ、いろいろ好きにやるさ」

「ふうん、俺はもう決めてるぜ！まず、最初の1週間で宿題を終わらせて、

後は海やプールに行くんだ！」

「何でだ？体を焼くのか？」

「フツ、そんなシヨボイ理由でプールに行くわけがないだろう。」

プールにいる可愛い水着の女の子に話しかけて、その後にその女の子たちと遊ぶんだよ」

それこそシヨボイ理由じゃないか。

夏休みの過ごし方がナンパとは・・・、夏休みが泣いてるぞ・・・。

～帰宅後 家～

さて、僕はなにをしようかな・・・。

特にやることもないし、宿題でもするか。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「うーむ、この連立方程式の作り方が分からん・・」

「あれ？お兄ちゃん、宿題やってんの？」

「ああ。お前はやらないのか？」

「今日はしない。あ、私 出かけてくるから」

「はいはい」

くそ・・、さっぱり分からん・・。

ピンポン

・・？ 誰だ・・？

ガチャ

「よお霧生、プールいこうぜ」

「行くかバカ、ブツ殺すぞ」

「いきなりヒドイな、お前」

「宿題はどうしたんだ」

「今日はとりあえず、遊び倒すんだ。宿題は明日からやるから」

・・まるで小学生の言い訳だな。

「とにかく、僕は行かないぞ」

「まあ話を聞けつて。プールに行けば可愛い水着の女の子がいっぱいいるぞ〜？」

こいつ、そんなこと言って、僕が行くとも思ってたのか。

「霧生、まだか〜？」

「まだだよ。ていうか、なんでお前が僕の部屋にいるんだ？」

「お前が「宿題が終わったら行く」って言ったからだろ」

ま、まあな。別に女の子が目当てで行くわけじゃないぞ。

「ふう、数学の宿題終わりー」

「よっしゃ！行くぞ、霧生！」

「行くつて、もう3時だぞ？」

「大丈夫だつて、3時ならまだ女の子はいるから」

いや、僕が心配してるのはそういうことじゃないのだが・・・。

プール

「おおおつ、水着の女の子がいっぱいだぞ、霧生！」

「それと同じくらい男もいるけどな」

「シケること言うなよな。お、あれ美保じゃないか？」

「え？」

「はら、あのベンチの前のプールの淵に座ってる子」

「あー、本当だな」

美保も来てたのか。なんか、ありがちなイベントが起こりそうな気がするが、気にしないでおこう。

「あれ、お前の妹じゃないか？」

「なにい！？」

「美保のちよつと右で遊んでる子」

えつと、美保のちよつと右・・・うわ、本当にいやがった！

そういえば華音のヤツ、出かけるとか言ってたけど、プールに来ていたのか・・・！

いるって分かってたら来なかったのに・・・！

「なあ霧生、もうちよつと近づけば美保の水着姿、よく見えると思うか？」

「何言つてんだお前。いそこなんだろ？」

「何言つてんだシスコン兄貴。お前も妹の水着姿、近くで見たいんだろ？」

「んなわけないだろ！あと、僕はシスコンじゃない！」

↓帰宅後↓

疲れた……。結局、白瀬は美保の水着姿を見に近くまで行つちまうし、

途中で美保に見つかりそうになるし……。

大変だった……。初日からこんなで大丈夫か……。

しかし、こんな出来事は今年の夏休みのほんの序章に過ぎなかった・。

↓夏休み1日目↓

あーあ、ヒマだな……。宿題でもするか……。

ピンポーン

「誰だ？最近、来客が多いな……」

ガチャ

「こんにちは……」

「あ……、美保ちゃんか」

「えっと、華音と遊ぶ約束してたんですけど……。華音いますか・？」

「あー、今はちょっと出かけちゃってるかな……」

「じゃあ、中で待っててもいいですか……？」

「え？ああ、いいよ」

さて、美保は本を読んでいるみたいだからいいだろうけど。

僕は何をすればいいのやら……。

英語の宿題でもしたいところだけど、

お客が来ているのに、この場を離れるわけにはいかないだろう？

で、今 こうしてソファに座って、向かい合っているというわけ。

しかし、今日はいつも以上に目のやり場に困る・・・。

今日の美保は下着みたいなYシャツにミニスカートをはいている。

上を見れば、丸みを帯びた胸や身体が目に入り、

下を見れば、きれいな脚や太ももの間から白い下着が目に入る。

どうすればいいんだよ・・・。

・・・あ、でも。 美保は本を読んでいるから、僕の目線には気づいてないのか・・・。

・・・だからって美保のパンツを見続けようと思ってるわけじゃないぞ。

しかし・・・、やっぱりアレだな・・・。

中学2年生ぐらいになると、大きくなってくるもんだな・・・。

その・・・、胸がな・・・。

おっと、いかん・・・。

これじゃ、女子中学生の身体を評価しているただの変態じゃないか・・・。

こんな状態が長く続いたら・・・、僕はおかしくなっちまうぞ・・・。  
くそー・・・、華音・・・早く帰ってこい・・・。

・・・

・・・

・・・ハッ！

「・・・あれ？ 今、何時だ・・・？」

「あれ、お兄ちゃん。やっと起きたね」

起きた・・・？・・・そうか、いろいろ考えてるうちに寝ちまってたのか。

「美保が帰る頃には熟睡してたよ」  
「そうか・・・。」

まったく・・・、初日からこんなで大丈夫かな・・・。

～夏休み8日目～

さて、初日から1週間ぐらい立ったな。

宿題はだいたい終わってるし、この調子なら最終日までには全部終わるな。

今日はちよつと家で休むか。

ピンポーン

・・・毎度毎度タイミングの悪い時に・・・。

ガチャ

「霧生、キャンプ行こうぜ！」

「やかましい！クズ以下の分際で！片腹痛いわ！」

「きよ、今日はいつも以上にヒドいな・・・」

「お兄ちゃん、うるさい」

怒られてしまった・・・。まあ、今のは言い過ぎだったか。

「お前はすぐ思いつきで行動するな・・・」

「今回は思いつきじゃないぞ」

普段は思いつきなのか・・・。

「今日、そのファストフード店でたまたまクラスメイトに会っ  
たな。」

知ってるだろ？ 鮎川と青野と俊介」

「ああ、あいつらか・・・」

鮎川みなみ 女 高校2年生、僕たちと同じクラス。

青野優 女 高校2年生、同じく、同じクラス。

渦木俊介 男 高校2年生、上の2人とよく一緒にいる。僕と夏菜と白瀬みたいな感じかな。

ちなみに俊介は中学校のときも一緒だった。

「で、そいつらと浅井と俺と霧生でキャンプに行こうという話になったんだよ」

「なるほどな。そういうことなら行くわ」

「決まりだな！じゃ、明日迎えに来るから」

「迎え？」

「そ、鮎川のお父さんが送ってくれるらしいぞ」

「へえ」

と、いうわけで。キャンプへ行くことになったのである。  
どうせ家にいたって何もないしね。

（夏休み9日目）

僕は今、みなみのお父さんの車に乗っている。

白瀬 「うおお、キャンプだぞキャンプ！」

晃平 「いやいや、お前は、はしゃぎ過ぎだから」  
小学生だなこいつ。

俊介 「そうだぞ白瀬。私語は慎めよ」  
いや、そこまでは言っていないから。

みなみ「もうすぐキャンプ場に着くから、荷物を降ろす準備しててね」

優「私はもう準備してるよ！」

夏菜「私もー！」

お前ら、今静かにしろって言われたばっかだろ。

あ、そうそう。 みなみ、優、俊介のことをよく知らないだろうか、説明しておこう。

みなみは標準的な女の子で、優しくて純粋なんだ。僕は結構好きだな。

優は夏菜と似たような性格で、おてんばでいたずら好きな女の子だ。典型的な女子だな。

俊介はさつきも言ったように、中学校のときから一緒に、それなりに仲はいい。

こんなトコかな。 おっと、キャンプ場に着いたみたいだな。

夏菜「着いたー！」

晃平「元気がよろしいことで」

優「何言ってるのっ！人間、元気が一番よっ！」

お前らは元気過ぎるんだよ。

みなみ「お父さんが明後日に迎えにくるって」

晃平「そうか、それまでは好きにしてろってことだな」

みなみ「……………」

晃平「……………」

みなみ「な、何でもない……」

？ 何だ、一体？

白瀬「はい、ご飯を作ろう！」

夏菜「おおーっ！」

晃平 「夏菜はいいとして、白瀬、お前料理できんの？」

白瀬 「したことないが、がんばる」

晃平 「みなみ、お前料理できるか？」

白瀬 「おおいつ！」

結局、料理は夏菜、白瀬、優。

その他、薪集めなどは僕、俊介、みなみが担当することになった。

くそー、意外と大変だな・・・。

みなみ 「霧生くん、これで足りると思う？」

晃平 「ん？すごいな、もうそんなに集めたのか」

みなみ 「うん・・・」

俊介 「おーい、霧生！」

晃平 「ごめんな、ちょっと呼ばれたから。あとでな」

みなみ 「う、うん・・・」

みなみ 「・・・・・・・・・・」

晃平 「どうした？」

俊介 「ほら見るよ、アリの行列があるぞ」

・・・そんな事言うために僕を呼んだのか！？

こいつの脳は幼稚園児以下だな。

俊介 「アリってたくましいよなあ」

晃平 「ソウダネ、スゴイヨネ」

俊介 「スゲー棒読みだな、おい」

あいてするのが面倒だな、こいつ。

俊介 「ま、冗談はここまでにして」

晃平 「冗談にしては長かったな」

俊介 「お前、鮎川のこと好きなの？」

え？

晃平 「なんでだよ？」

俊介 「結構仲良く話してたからな」

晃平 「ふうん、まあ嫌いではないかな」

俊介 「ほほう、それは好きと取ってもいいのかな？」

実際、嫌いじゃないし。好きか嫌いかで言ったら、好きかな。

晃平 「いいよ」

俊介 「いいの？」

多分、こいつとしては僕をからかいたかったんだろうけど、  
こうやって開き直れば、からかいにくいもんだ。

俊介 「ふうん、意外だなあ」

晃平 「そうか？あいつ優しいし、結構可愛い方じゃないか？」

俊介 「そうだけど、俺の好みじゃないな・・・」

お前の好みなんぞ知らん。

俊介 「どっちかというと、浅井みたいなヤツの方が好きだなあ」

晃平 「マジで!？」

僕からすれば、そっちのほうが超意外だよ！

え、夏菜？ あいつは、元気しかとりえがないだろ？

うーん、夏菜ってモテる方なんだなあ。

夏菜 「おー、遅かったねー。ご飯できてるよー」

白瀬 「俺ががんばって」

優 「手伝ったんだよね？」

白瀬 「おう！」

プライドないのか、こいつには。

俊介 「お、意外に美味い」

夏菜 「意外って何ー？」

みなみ 「そんなことないよ、美味しいよ」

優 「お、さすがみなみ！」

うむ、たしかに美味しいな。 夏菜って意外と料理上手いな。

さあて、そろそろ寝る時間なのだが、ある事件が起こった。

事件というほどのものでもないのだが・・・。

なんと、テントが1つしかないのだ。

もちろん、男女が6人で並んで寝なければいけないということも問題なのだが。

なにより、そんなことしたら 暑い。

だが、優がとんでもないことを言い出した。 いや、言い出しやがった。

優 「じゃあ、どうせ6人で並んで寝るんだったら、クジとかで順番きめよーよ！」

夏菜 「順番って、寝る順番のこと？」

優 「当然！」

キッパリ言ったあつ！

賛成派ー夏菜、優、白瀬、俊介

反対派ー僕、みなみ

多数決の結果、クジをひくことになってしまった。

まあ、端っこをひいて、壁のほうを向いて寝れば問題はないだろう。

結果発表 夏菜ー俊介ー優ー白瀬ー僕ーみなみ

うおおお、微妙なところおお・・・。

これでもかというくらい微妙な位置だ・・・。

ま、隣に白瀬がいるから、まだいいとするか・・・。

夏菜 「やったー、端っこだ」

優 「私、男子に挟まれてるー」

晃平 「自分で言い出したんだろ？。文句言つなよ」

白瀬 「霧生が隣だから、話し相手にこまらないな。いやー、よかったよかった」

それはどうも。僕はお前の相手はしたくないよ。  
みなみ「・・・・・・・・・・」

（就寝）

さて、寝ようかな。

白瀬 「そういえば霧生、明後日部活があるらしいぞ」

晃平 「こんなとこまで来て部活の話はやめてくれ」

白瀬 「だって、話す内容がないからなあ・・・」

晃平 「じゃあ、寝ろよバカ。おやすみ」

白瀬 「ああ、おやすみー」

・・・・・・・・寝れん・・・。

なぜかって？

隣から可愛い寝息が聞こえるからだ・・・。

白瀬の寝息じゃないぞ、みなみのだ。

隣でこんな寝息たてられてちゃ、寝ることに集中できん・・・。

・・・やっぱり、女の子のこういうところを見ると、可愛いと思っ  
ちやうよな・・・。

まず、僕の身近にこんな子がいないからなあ・・・。

というか、このままじゃいつまでたっても寝られないぞ・・・。

「夏休み10日目」

晃平 「うう・・・」

夏菜 「おはよ、晃平。眠そうだね？」

晃平 「ああ・・・」

結局2時間弱しか眠れなかった・・・。

みなみ 「眠れなかったの・・・？」

晃平 「あ、まあ、そんなトコだ・・・」

みなみの寝息が原因だとは言えん・・・。

みなみは別に悪くないのだが。

白瀬 「俺はグッスリ眠れたぜ！」

晃平 「眠れなかった原因の半分は、お前が話しかけてきたからだぞ」

白瀬 「半分？もう半分の原因は何なんだ？」

え・・・？ いや、それは・・・。

晃平 「な、何でもいいだろ」

白瀬 「ほお・・・？ ま、いいや」

俊介 「で、今日は何するんだよ？」

優 「あ、まだ決めてないや」

決めとけよ・・・。

夏菜 「何するのー？」

晃平 「さあな」

俊介 「霧生、昨日の続きなんだけどな、お前は鮎川のことが好きってことでいいんだな？」

またその話か。しつこいやツだな。

晃平 「あー、いいいいいよ。もう好きにしろ」

俊介 「そうかそうか。ま、がんばれよ！」

と言って、俊介は去っていった。  
なんだ、あいつ。急に上機嫌になって。

僕が誰を好きになろうと勝手だろ。

というか、僕はまだ、みなみのことは好きじゃない・・・よね？

待て待て、なんか変になってきたぞ。僕はみなみのことは好きじ

ゃないんだよね？

そっだよな？ うん、間違いなく、そっだ。

絶対そっだ。

多分そっだ・・・。

きつとそっだ・・・。

まず僕がどう思っついていようが、みなみの方はどうなんだろうか・・・？  
まさか、「僕のこと好きか？」とは聞けないしな・・・。

というか・・・仮に僕がみなみのことを好きだとして、俊介には関係ないだろ。

なのに、なんであんなにしつこく聞いてきたんだ・・・？

僕が答えた後に、機嫌がよくなったのも気になる・・・。

・・・そのうち確かめておくか。

白瀬 「よお霧生。めずらしく何か考え込んでるな」

お前にそんなこと言われたくないな。

晃平 「そう見えたか？」

白瀬 「見えた」

晃平 「そうか。眼科に行っとけ」

白瀬 「しらばっくれるなよ。何か、聞かれちゃマズイ事でも考え  
てたのか？」

晃平 「お前じゃあるまいし」

白瀬 「引つかかる言い方だな・・・。ま、いいか」

いいのかよ・・・。

白瀬 「で、何考えてたんだ？」

晃平 「お前に言ったところで、解決はできん」

白瀬 「まあ、言ってみる。 力になれるかもしれないからな」

お前が僕の力になった事は、一度もないよな・・・。  
ま、いいか。

晃平 「お前、俊介が誰が好きか知ってるか？」

白瀬 「はあ？知ってるぞ、それぐらい」

え？ 知ってるのか？ ダメもとで聞いたのに。

白瀬 「たしか、浅井じゃなかったかな」

ええええええええつ！？

夏菜あ！？ 本当に？ 僕だったら、その発想はないわ。

だが、これでわかった。

白瀬の言う通り俊介が夏菜が好きだとすると。

夏菜の幼馴染で仲が良い僕にライバル意識を燃やして、僕が夏菜を  
好きかどうかを確かめるのは、

なんら不思議じゃないってことだな。

だから、僕がみなみを好きだって言ったときに、機嫌が良くなった  
ってわけか。

ちなみに、僕はみなみのことは好きじゃないぞ。・・・多分。

俊介 「そういえば霧生、お前宿題どれくらい終わった？」

晃平 「安心しろ、俊介。 僕は夏菜なんか眼中にない」

俊介 「え・・・？」

晃平 「白瀬から聞いたんだよ」

俊介 「・・・ああ、その事か。そうか、それを聞いて安心したよ。  
・・・」

・・・最後に、「・・・白瀬、殺す・・・」って聞こえたのは僕の気の

せいだろうか・・・。

さて、俊介の問題は解決したのだが・・・。

みなみ「・・・・・・」

僕はこいつと何を話せばいいんだ・・・？

僕のこと好きですか、とでも聞けばいいってのか。　ハハ、傑作だな。

本当にどうすればいいんだ。　美保のあの展開より困ったぞ、これは。

と、とりあえずアレだ。　たわいもない話でも・・・。  
いやいや、ダメだろ、それは。

みなみ「ねえ・・・？」

晃平「はいっ！？」

いきなり話しかけられたもんだから、スットンキョンな声を挙げてしまったぞ・・・。

みなみ「こうして、みんなと話してるのって・・・、楽しいよね」

晃平「・・・そうだな」

みなみ「今日はずっとここで、こうしててもいい・・・」

晃平「・・・それはそれでいいもんだよな」

みなみ「うん・・・」

～夜～

夏菜「恒例の晩御飯タイム！」

晃平「まだ2回目だろうが」

白瀬「今日こそはがんばるぜ！」

晃平「期待しないで待ってる」

で、僕とみなみと俊介は、ここで3人が夕食を作るのを見ているわけだ。

晃平 「やっぱり、料理ができるやつはいいよな」

みなみ 「料理ができる人が好きなの・・・？」

晃平 「え？ まあ、そりやできる方がいいかな・・・」

みなみ 「そうなんだ・・・」

俊介 「眠いな・・・」

晃平 「眠くなるの早いな。まだ、えつと・・・6時だぞ？」

俊介 「昨日はあんまり眠れなかったんだよ・・・」

お前もか。

俊介 「お前も眠れなかったんだろ。何で眠れなかったんだ？」

晃平 「え・・・？ いや、それはだな・・・」

言えん・・・。みなみの寝息を聞き続けていたからとは言えん・・・。

晃平 「し、白瀬のいびきがうるさかったんだよ」

俊介 「白瀬の？ 俺も眠れなかったけど、いびきなんて聞こえなかったぞ？」

晃平 「ぼ、僕は隣だったからよく聞こえたのかもなあ・・・」

俊介 「ふうん、そうなのか」

な、何とかごまかした・・・。

夕食後 就寝

さて、今日はすぐに寝るぞ・・・。

スー・・・スー・・・

ん？ 隣から何か聞こえるが・・・まさか。

ええええええええええ！？

も、もう寝てやがるぞ、みなみのヤツ！

寝つき良すぎだろ、僕が寝る前に寝ちまうってどういことだ！

・・みなみに怒っても仕方がない・・。

とにかく、今日は耳をふさいで寝る・・・！

く夏休み１１日目く

やったああ！今日はグッスリ眠れたぞ！

何でもないようなことが幸せだったと思うとはよく言ったもんだな。  
おっと、はしゃぎ過ぎてしまった。

俊介 「うう・・・」

白瀬 「ううう・・・」

晃平 「あれ、お前ら。眠れなかったのか？」

俊介 「・・ま、まあな・・」

ふうん、かわいそうに。

眠れるっていいことなんだなあ。

そしてみなみのお父さんが迎えに来て、ドタバタのキャンプは終わった。

みなみが僕のことをどう思っているかは、分からないままだった。

「ただいま」

バッチイイン！

「痛ってえええっ！」

「また引つかかった！お帰り、お兄ちゃん」

また輪ゴムか・・！ 本当に、こういう仕掛けになってんだろーね  
コレ。

まったく、ウチの妹は・・。 みなみとは大違いだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・？

あれ？ またみなみが出てきたぞ・・・？

さつきからやたらとみなみが出てくるのだが・・・。

まさか、僕はみなみのことを・・・・・・・・。

いやいや、そんなことは断じてない。・・・と、思う。

くいきなりとんだけど、夏休み最終日

さて、夏休みの宿題は終わったし、今日は最終日だし、ゆっくりするかな。

ピンポン

「はいはい、いつものパターンですね。はいはい」

ガチャ

「何か用か？」

「霧生、遊びに行こうぜ」

「悪いが今日はダメだ。今日はゆっくりする予定だから」

「そうなのか？ こないだ、キャンプに行ったメンバーで遊ぼうってことになったから

誘ったんだが」

「・・・・・・・・行ってもいいぞ」

「いや、無理に来なくても・・・」

「行く、行かせてください！」

「わ、分かったから、そんな剣幕で言うな・・・」

何故、行く気になったのかは分からない。

だが、僕は「キャンプに行ったメンバー」というのを聞いて、行く

気になったのかもしれない。  
ゆっくりする予定だったが、まあいいだろ。

夏菜 「やつほう！どこ行く？」

優 「やっぱりアニメイトでしょ！」

白瀬 「ドラッグセガミ」

俊介 「なぜそこへ行きたいんだ？」

やっぱり来なけりゃよかった。うるさいもんな、こいつらは。  
たった1人を除いて。

みなみ 「……………」

おとなしいなー、こいつ。 控えめなのかな？

夏菜 「よし、夏休み最終日だし、アニメイト行こつか！」

だから、接続の仕方がおかしいって。  
最終日だして何だよ。

優 「着きましたっ！」

晃平 「頼むからもうちょっと静かにしてくれないか……？」

白瀬 「ドラッグセガミに行きたかったのになあ」

俊介 「だから、なぜそこに行きたがる？」

俊介 「お、エヴァンゲリオオンのキーホルダーがあるぞ、霧生！」

晃平 「わり、興味ねえや」

あんまし、アニメとかアニメグッズとかに関心ないんだよな、僕は。

みなみ 「……………」

晃平 「みなみは、何か買ったりしないのか？」

みなみ 「えっ……！？ あ、えっと、あんまりアニメとかに

興味ないんだ・・・」

晃平 「へえ、そうなのか。僕と一緒にだな」

みなみ 「え・・・？ い、一緒・・・？」

晃平 「ああ、僕もあんまりアニメに関心ないんだ」

みなみ 「そうなんだ・・・」

夏菜 「いやあ、いっぱい買っちゃったねー」

優 「うんうん」

白瀬 「ドラッグセガミ・・・」

俊介 「だから、なぜ？」

こいつらはよかっただろうけど、僕たちはあんまり楽しめなかったな。

僕たちって誰かって？

僕とみなみに決まってるだろ。

晃平 「あんまり楽しめなかったな・・・？」

みなみ 「そ、そんなことなかったよ・・・。私は・・・」

？ 「私は」って、じゃあ、楽しんでなかったのは僕だけかよ・・・。

みなみ 「あ・・・あのね・・・、えっと・・・、私・・・」

夏菜 「みなみは何買ったのーっ？」

みなみ 「え！？ あ、いや・・・、何も・・・買ってないけど・・・」

夏菜 「そうなのー？ もったいないなあー」

もうお前はどっか行っちゃえ・・・。

さあて、最終日は有意義・・・に過ごしたな。  
・・・。

やっぱり、あのキャンプ以来だよな・・・。      みなみのことに気にしだ

したのは・・・。

・・・・・・そろそろ寝るかな・・・。

〈新学期〉

新学期が始まったなあ。

「霧生！宿題みせてくれええ！」

「お前、終わってなかったのに昨日遊びに行ったのかよ！」

「うん」

「うん。じゃねえよ！」

「・・・・・・」

夏休みが終わり、またいつもの日々が始まった。

しかし、今年はいろいろと大変なことが起こりそうな気がする・・・。

「そういえば、夏休みが終わったらすぐに学園祭があるんだよな。今年は何するんだろうな？」

## 7 普通の夏休み（後書き）

6、鮎川みなみ 17歳 女

ジヨブ 内気な純粹系少女

血液型 O型

スリーサイズ 82 - 57 - 85

## 8 普通の準備（前書き）

晃平「最近・・・やっぱりエッチイベント増えたな・・・」

作者「今回は少ないから安心しろ」

晃平「夏休み明けにエッチイベントは勘弁してくれよ・・・？」

## 8 普通の準備

さて、夏休みも終わり、もうすぐ学園祭だな。

「霧生、学園祭の出し物、お前はなにしたいんだ？」

「そーだなあ・・・、普通に喫茶店とかかな・・・」

「フツ、普通の喫茶店だと？ 甘いな、それだから現実には現実なんだ！」

「・・・なんだ？ 夏休みが終わってから人格変わったな、お前・・・」

「喫茶店といえばメイド喫茶だろ！」

「お前の頭の中にはそういうのしかないのか・・・？」

「ああ！」

いや、そこでカッコ付けられても、かつこよくはないぞ・・・？

↓次の日 学校↓

「というわけで、学園祭で何をするかを決めたいと思います！」

夏菜が司会とは・・・、世も末だな・・・。

「はいはい！メイド喫茶を希望します！」

あんなやつと幼なじみだとは・・・、泣けてくるぜ・・・。 うう・・・。

しかも、ほかの男子も何人が賛成してるし・・・。

別に普通の喫茶店とかでいいと思うのだが・・・。

ダメなのか？ それじゃ・・・。

結果。 2年3組（僕達のクラス）の出し物、メイド喫茶。

「よっしゃああ！」

「はしやぎすぎだ、白瀬」

「何を言っでやがるんだ、霧生！ お前は嬉しくないのか？」

正直、別にどーでもいいっす。

「だいたい、何でそんなにメイド喫茶にこだわるんだ？」

普通の喫茶店じゃだめなのか？」

「フツ、昨日も言ったが、そんなだから現実はいつまでたっても現実なんだよ」

何を当たり前なことを言っているんだこのバカは。

僕はこいつにこっ水を差した。

「でも、メイド喫茶だって現実のモノだろ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「さて、明日は準備だな！」

反論は！？

くさらに次の日く

「というわけで、担当を決めましょう！」

本当に何で夏菜が仕切ってるんだろっね・・・？

「衣装を担当したい人ー？」

「はいはい！」

・・・白瀬よ・・・ お前はなぜそこだわる？

「霧生、お前もだぞ！」

・・・え？・・・僕もおお！？

結果（今まで紹介した中で）。

衣装担当 僕、白瀬、俊介、みなみ（優による強制）

料理担当 夏菜、優

書いてある通り、みなみは優による強制で、衣装担当に。  
なぜ優が強制したのかは分からないが・・。

「さらにさらに次の日」

「さて、今日から衣装担当の仕事がはじまるぜ！」

「おおおおっ！」

お前らはなぜそんなにやる気なんだ？

今回ばかりは、本気で引きかねないぞ・・。

「・・・・・・・・・・」

・・みなみは相変わらず黙ったままだし・・。

しょうがない、白瀬たちの被害を受けないように、僕が相手をして  
おこう・・。

「俊介、お前はどんなのがいいんだ？」

「そうさなあー」

どこの人やねん、お前は。

「やっぱり・・・・・・・・・・」。

・・白瀬はどんなのがいいんだ？」

逃げた！ 答えが浮かばないもんだから逃げたぞ、こいつ！

「俺か？ 俺はもちろん・・・・・・・・・・」。

・・まあ、いろいろやるさ」

お前もか！ しかも、夏休み前の僕のセリフだろ、それ。

「・・みなみ・・？」

「・・えっ!？」

「悪いな、あいつらがうるさくて・・」

「あ、ううん・・。大丈夫だよ・・」

「そうか。ところでお前、なんで優に強制されたんだ？」

「え・・・・・・・・？ それは・・・・・・・・その・・」

・何か、マズイ事聞いたのか、僕？

「霧生、衣装の試作ができたぞ」

「悪い、とりあえず蹴っていいか？」

「な、何でだよ？」

「見て分かんないのか・・・？」

「うん」

「ハア・・・、あのな・・・。これは、高校の学園祭で使うんだぞ？

なんで、超本格的に作ってんだよ！？ 超ミニスカだし！」

「ああ、それは俊介のアイデアだよ」

「んな事聞いてんじゃねええつ！」

「俺の作品は常に、本格的だ」

「限度つてもんがあるだろ！ 考えろよ、学園祭だぞ！」

「チエ、いいと思ったのにな」

どっからその自信が来るんだ？ 宇宙からか？ 銀河系からか？

「霧生、さっきから怒りすぎだぞ。」

何だ？ もしかして、鮎川がこういうの着るのがイヤで怒ってんじゃないのかー？」

「ナンノコトヤラサッパリ・・・」

「ごまかすなって！ ま、そういうことなら仕方ないな！  
お前に免じて、これは勘弁してやるよ」

何言っただよお前は。僕は別にみなみを・・・。。。

・・・嫌いではないが、好きでもないぞ。・・・おそらく。

くさらにさらにさらに次の日く

「ふう、こんなもんだろ」

「・・・まあ、これならいいかな。ギリギリで・・・」

「結局、鮎川とお前は何かしなかったな」

「そうそう。 仲良くお話してたしな」

いやいや、お前らがマジすぎて、みなみは引いてたんだよ・・・。

僕はそんなお前らと同類と思われるたくないから、みなみと会話して  
たんだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「えっと、学園祭まであと何日だっけ？」

「・・・・1週間後だよ・・・」

え？ ああ、みなみか。

「そうか、ありがとな」

「・・・・うん」

そうか、もうあと1週間なのか・・・。

早いもんだな・・・。

まあ、料理担当のほうも順調らしいし、大丈夫だろ。

こうして、学園祭の準備は順調に終わり、

あとは本番を待つのみだな。

だが、学園祭の直後。

僕は衝撃を受けることになるうとは・・・・。

## 8 普通の準備（後書き）

7、渦木俊介 17歳 男

ジョブ 恋のキューピッド（？）的存在

血液型 B型

## 9 普通の学園祭（前書き）

作者「さて、今回は衝撃の展開！」

## 9 普通の学園祭

〔学園祭1日目〕

さて、ここでウチの学校の学園祭について説明しておこう。  
基本的にどこも同じなんだけどな・・・。

学園祭は2日間あって、出し物は以下の通り。

1年1組 喫茶店

1年2組 お化け屋敷

1年3組 たこ焼き・お好み焼き

2年1組 お化け屋敷

2年2組 演劇

3年1組 演劇

3年2組 喫茶店

3年3組 カフェテリア

そして、僕たち2年3組は、メイド喫茶・・・。

いやだな・・・、あんまり好きじゃないしなあ・・・。

もう決まった以上、仕方のないことなんだが。

だって、普段見慣れてる女子が、メイドの格好してるわけだろ・・・？

そういうのって、「いいな」と思う子と、「イマイチ」って思う子  
に、

分かれるんだよな絶対。

なお、料理担当の女子は、メイドの格好をしないと聞いて、

俊介は落ち込んだよ。

何故かって？

これまでの話を読めば分かる。

白瀬は楽しみにしてるけどな・・・。

さて、学園祭1日目の始まり始まり。

・・・。

メイドの格好をしたみなみを可愛いと思うのは僕だけだろうか・・・。

ま、まあ、普段もかわいいのだが・・・、

メイド服着て、おどおどしてるトコなんて・・・なあ・・・。

みなみの純粹さが、全面的に出されてるよな・・・。

・・・なぜ、みなみのことばかり考えてしまうのか・・・。

・・・気のせいだ・・・よな。

・・・気のせいだ。

～午前の部 終了～

休憩か・・・。

「ふうう・・・、いやーよかったよなあ、霧生！」

「・・・え！？ あ、ああそうだな・・・」

「霧生、最近なに言っても上の空だな・・・。

好きな女の子でもできたか？」

「・・・は！？」

「いや、だって最近はある俺に対して突っ込まないし」

「僕たちは漫才師じゃないぞ！」

「ほーら、突っ込みにキレがない」

くっ・・・！

こいつ・・・、いつか絶対、必ず、何があろうとも殺す！

で、結局あいつらはメイド姿の女子を眺めている、と・・・。

・まあ、みなみをずっと見つめている僕が言えるセリフじゃないが・・・。

「・・・・・・・・・・」

「霧生、ヒマだし、どっか周ろっぜ」

「ああ、いいよ」

「さあて、どこ行こつかねえ」

「どこでもいい」

「じゃ、喫茶店」

「おい、なんか飲むなら僕たちのところでいいだろうが」

「そうか、その発想は無かったわ」

無かったんかい・・・。 頭、大丈夫か・・・？

「じゃあ、カフェテリアで」

「人の話を聞いていたのかおまえは・・・？」

「まあ待てよ。ここは品揃えがウチより多いだろ？」

「自慢げにいうな」

「ほら、ウチはメイドが売りだからな！」

えらそうにいうなよ・・・。

「ふうん、結構よさそうな店だな」

「さすがはカフェテリア。客が多いねえ」

「おい、僕達のとこより客が多くないか・・・？」

「・・・そうだな・・・。よし、ウチのメイドの衣装をもっと・・・」

「却下！」

「まだ何も言っただろ？」

言わなくても分かるんだよ、このバカが。

「・・・そろそろ今日は終わりだな」

「あの・・・霧生くん・・・」

「ああ、みなみか。どうかしたのか？」

「あの・・・えつと・・・・・・やっぱりなんでもないや・・・」

「そか・・・じゃ、また明日な」

「・・・うん、また明日ね・・・」

↓帰宅後 家↓

「お兄ちゃんの高校って、今、学園祭やってるんだよね？」

「ああ」

「ふーん、私も行こつかなあ・・・」

えええええ？ 来るの？ 来なくていいのに・・・。

「美保も連れて、明日行くね」

「・・・あのエロトラブルメーカーも一緒か・・・」

まあ、この時期にミニスカートで来たりはせんだろ・・・。

いや、待てよ・・・。 確か、冬でもミニって言ってたよな・・・？

「・・・なら秋でも当然・・・。 あーあ・・・。」

頼むから、学校であんなイベントだけは起こすなよ・・・。

↓学園祭2日目↓

「さて、2日目だぞ！ 霧生、今日はどうするんだ？」

「僕は今日はすみっこでじっとしてるよ・・・。」

「何だ？ どうかしたのか？」

「妹とお前のいところが、来るんだよ・・・」

「・・・？ 美保が来て、なんでじっとする必要があるんだ？」

「・・・あ、そうか。 白瀬には、あのエロイベントは話してないのか・・・。」

話さないほうがいいんだけどな・・・。

妹のように可愛がつてるヤツのパンツを、  
何度も見たとか言ったらどうなるか・・・。

「ま、いいや。 行こうぜ、霧生」

いやだああああ・・・。

「僕はもうどこにもいきたくないよ・・・」

「そういうなって。 お、美保だ」

お前はいいところを見つける天才か!?

何で見つけるんだよ?

しかも、美保のヤツ。 案の定、ミニスカートじゃねえかよお！  
近づいたら、即エロイベントだな・・・。

ミニスカは

エロイベントへの

毒フラグ

霧生晃平。

ここは近づかないのが吉！

さあ、行こう。

「おい、霧生。 どこ行くんのだ？」

「メイド喫茶へ戻る」

「おお、やっとメイドの良さが分かってきたか」

「違う！」

美保がいるときは、ロクなイベントが起こらない。

そりゃ、突然に、偶然に、パンチラしたなら、「おっ、ラッキー！」  
みたいになるよ？

でもな、パンチラから始まって、着替えも覗いて、さらにヌード姿  
まで見ちまったんだぞ？

全部、あの忌々しい妹のせいだ・・・！

くそっ・・・、少しはみなみを・・・、・・・・・・？

また、みなみが出てきたぞ・・・？

何なんだ・・・？

まさか・・・まさかとは思うが・・・、

やはり、僕はみなみのことが好きなのか・・・？

↓ 午後の部 開始 ↓

・・・やっぱり・・・、僕は・・・どうなんだろうか・・・。

「霧生、どっか行こうぜ」

「お前の頭の中には、どこかへ行くという選択肢しかないのか？」

「ない！」

ハッキリ言い切りやがった・・・。

仕方ない、行くか・・・。

もし美保に出会ったら・・・、その時はその時さ・・・。

あーあ、メイド喫茶をですぐに、会っちゃったよ・・・。  
誰につて・・・？

あの「パンチラ毒フラグ女」だよ！

僕の頭の中では、 美保「エロ」パンチラ という等式しか出てこ  
ないぞ・・・。

あああああああああああつ！

やっぱり、メイド喫茶に戻る！

「で、結局帰ってきたわけだ」

「はあ・・・」

「霧生、何かあったのか？」

「お前に言ったところで、解決には繋がらないよ・・・」



．．えっと、この沈黙は．．．？

しばらく沈黙が続いた後、みなみが口を開いた．．。

「あの．．、霧生くん．．．」

途切れ途切れだったけど、僕には確かにこう聞こえた．．。

「私と．．付き合ってください．．．」

## 9 普通の学園祭（後書き）

8、青野 優 17歳 女

ジョブ 元気な女の子

血液型 AB型

スリーサイズ 75 - 52 - 79

## 10 普通の告白

ある日の放課後・・・、僕はある女の子に告白された・・・。

鮎川みなみ 17歳 高校2年生、純粹かつ健全な女の子。

そんな子に、僕は告白された。

しかし、返事はまだしていない・・・。

～土曜～

「よお、珍しいな。 お前の方から俺を呼ぶなんて」

「ああ、まあな。 入れよ」

こいつは普段はふざけてるが、真剣な時は本当に真剣なので、僕は相談相手に白瀬を選んだ。

「あ、霧生。 ジュースかなんかあるか？」

「白瀬・・・、僕、どうしたらいいか悩んでな・・・」

ピンポーン

・・・何なんだよこんな時に・・・！

ガチャ

「こんにちは・・・」

「ああ、美保ちゃんか・・・」

「華音いますか？」

「ああ、いるよ。 呼んでくるから、ここで待ってる」

「はい・・・」

華音め、こんなときまで美保を呼びやがって・・・。

だが、エロイベントが起こったとしても、今はどうでもいい・・・。  
もっと重要なことがあるからな・・・。

「あ、お帰り霧生。今回はやつれてないな」

「白瀬、真面目な相談なんだが・・・」

「・・・何だ・・・？」

僕は、あの時の事について話した。

「・・・なるほど・・・」

「どうしたらいいと思う・・・？」

「・・・。まず、お前はどっ思ってるんだ？」

「・・・そこなんだ・・・。簡単なようで、そこが一番の難題なんだよ・・・。」

僕はみなみのことを好きなのか・・・？

そのことについては、何度も考えてきた。

だが、答えは出ない・・・。

「・・・分らない・・・」

「・・・、なら、じっくり考えるしかないんじゃないのか・・・？」

「やっぱりそうか・・・」

「悪かったな、大して役に立てなくて・・・」

「いや、参考になったよ。。じゃあな」

「おう、がんばれよ」

ガチャリ

・・・ふう、やっぱりゆっくり考えたほうがいいのか・・・。

でも、ゆっくり考えなきゃいけないほど、なんとも思っていないわけじゃない・・・。

たしかに、みなみに対して好感は持っている。

そこからだ。

じぶんでも、みなみを好きだと理解しようと思えばいいと思うのだ

が、  
うまくいかない・・・。

・・・じゃあ、僕はみなみのどんなところに好感を持ったのか・・・。

そこを追求すれば、答えにたどり着くかもしれない。

ガチャ

「きゃ・・・」

「・・・ハア・・・」

またか、またリビングで着替えてるよこいつは。  
どうせ、華音に言われたんだろうけどな。

ちなみに、今回の美保はブラジャーを外していて、  
たった今、パンツを脱ごうかというところで、

もうすこし入るのが遅かったら、完全に裸だった。

美保はあわててパンツをはきなおし、手で胸を隠した。

・・・だが、今の僕からしたらこんなことはどうでもいい。

やっぱり、僕は・・・。

結論が出た・・・。 決着は明日だ・・・。

　　次の日

『もしもし?』

「あ、悪いな、白瀬。 みなみの家の住所分かるか?」

『ああ、知ってる。 答えが出たのか?』

「ああ、まあな」

『そうかそうか、「真実はいつも一つ!」ってヤツだな』

「それはちよつと違うと思うぞ・・・?」

くみなみの家

・ここでもいいんだよね？

うん、鮎川って書いてあるし・・。

とりあえず落ち着いて、インターホンを押した。

ピンポン

「・・はい？」

「あ、みなみか？」

「・・霧生くん？」

ガチャ・・

「どうしたの・・？」

「あ、えっと、こないだの返事を言いに来たんだ」

「・・・・・」

「僕は、最初にお前のことをどう思ってるのか考えたんだ。

でも、結局少し好感を持っているということしか分からなかった・

」

「・・・・・」

「でも、どこに好感を持っているのかを考えたら、答えは出たよ。

僕は、みなみの純粋な優しさに好感を持っていたんだと思う」

「・・・・・」

「でも、僕たちはお互いのことを良く知らない・・。

だから、お互いのどこがどう好きなのか考えるのは、

もうちょつと時間が経ってからの方がいいと思うんだ・・」

「・・・・・そうなんだ」

「だから・・・・・、返事はYESだ」

「・・・えっ？」

「付き合ってからなら、一緒にいる時間が増えるだろ。だからその時間を通して、お互いのどこが好きかを、ゆっくり見つけられると思うんだ・・・どうかな・・・？」

「・・・うん・・・、ありがと・・・」

こうして、僕とみなみは恋人同士になった・・・。

僕的には、これだけでもよかったのだが、

もちろん、今年の残りの日数も普通に過ごせるわけが無かった・・・。

　　～さらに次の日～

「で、霧生。結局どうなったんだ？」

「フラれたよ」

「マジで・・・!？」

「いや冗談だよ、一応返事はOKにしたよ・・・。

どこが好きかはこれからゆっくりみつけていくよ」

「ほおう・・・？　やっぱり、夏休みが終わってから変わったよな・・・？」

「そうか？　お前もだろ？」

「・・・霧生・・・。あんまり浮かれてられんぞ・・・」

「何でだよ？」

「忘れたのか？　夏休み明けには中間試験があるだろ」

「・・・しまった・・・！　また夏菜に教えてもらわないとな・・・」

「いいのか？　可愛い彼女がいるのに」

「勘違いしてるようなら言うておくが、

僕は夏菜を恋愛対象としてみてないからな」

しかし、そうか・・・中間試験か・・・。

夏休み中は宿題しかやってないからなあ・・・。

また3人で勉強するハメになるんだろうけどな・・・。

## 11 普通の間試験

さてと、もうすぐ中間試験だ。  
今日はしっかりと勉強を……。

ピンポン

……はいはい、誰だろうね。

ガチャ

「霧生、勉強しようぜ！」

「……、お前らと勉強したことがあったか……？」

「ま、あるかないかでいったら……ないね！」

おい夏菜、自覚症状があるのか……。

……結局、勉強してるってわけだ。

まあ、夏菜なら僕の分からない問題も分かるしな。  
教えてもらえるからいいか。

「霧生……、ゲームしよーぜー……」

「おいこら、勉強はどーしたんだ」

「やめた」

やっぱり、こいつらと一緒にいてもいいことはないな……。

「何だよ、最近冷たいな。あーあ、羨ましいぜ、可愛い彼女さんがいてなー」

この野郎、カケラも思っていないクセに……。

あと、僕が冷たいのは、お前らが勉強しないからだ。

↓次の日 学校↓

「霧生！ 聞いたぞ、お前鮎川と付き合ってるんだってな！」

うう・・・、あんまりその事について触れられたくないのにな・・・。  
何故かって？ 格好つけて、カッコいいセリフ言っちゃったからだ  
よ・・・。

ああ、死にたい・・・。

「おい、聞いているのか？」

「あ、ああ、聞いているよ」

「本当か？ ま、いいや。」

お前、勉強とかしてるのか？」

「まあ、してるほうかな・・・。」

「ふうん、やっぱりみんなやってるんだなー」

お前はやってないのか・・・？

（放課後）

さて、学園祭の前までは白瀬や夏菜と帰っていたが、  
今日からは2人きりで帰ることが多くなりそうだ。  
なぜかというと、僕には可愛い彼女がいるからだ。  
今は試験休みで、部活もないし。

鮎川みなみ 高校2年生、僕の彼女。

「はぁ・・・、憂鬱だなあ・・・。」

「霧生くんは勉強してないの？」

「まあな・・・、あのバカども2人のせいだ・・・。」

みなみは勉強してるのか？」

「うん・・・、少ないけど・・・、毎日2時間はしてる・・・。」

2時間！？ 僕からしたら結構長いけどな・・・。

そうか、みんなちゃんと勉強してるのか・・・。

僕もちやんとしないとな・・・。

「さらに次の日」

「霧生、ついに明日だな」

「おかげさまで勉強できてませんよ・・・」

「まあそっぴうなつて！」

「言つよ！」

昨日のみなみの話を聞いた限りだと、ちゃんと勉強してるらしいしな。

「白瀬、みなみなんか1日に2時間は勉強してるんだぞ？」

「そりゃあ、鮎川は真面目だからな」

おい、それは「私はバカです」と認めたようなもんだぞ。

「帰宅後 家」

あーあ、せっかく可愛い彼女がいるつてのになあ。

学園祭が終わってからすぐ試験とかやめてほしいよな。

学園祭の前にくれればよかったのに。

「うーむ、相変わらず連立方程式の作り方が分からん・・・」

そっぴえば、いつもこの問題でつまつてるよな・・・

気分転換に出かけてみようかな・・・

ピンポン

・・・どうやら僕に安らぎの時間はないようだな。

ガチャ

「あ、こんにちは。 華音いますか？」

「美保ちゃんか。 華音なら・・・、」

えつと、どこ行つたんだっけ・・・」

「じゃあ、また家で待たせてもらつてもいいですか・・・？」

・・・正直やめてほしいけど、一応、客だからな・・・

「いいよ、入つて待つてろよ」

「はい、ありがとうございます」

さてと勉強しなくては。

あれ？　そういえば、華音や美保は勉強しないのか・・・？

中学と高校の試験日って、だいたい同じくらいのはずだよな・・・。

・・・ま、いいか。

（約1時間後）

ふう、疲れたな・・・。

何か飲もうかな。　いや、待てよ・・・、

リビングに行ったらまた美保が着替えてるんじゃないか・・・。

・・・いや、今日は華音がいないから大丈夫か。

ガチャリ

「・・・・・・・・」

案の定、着替えはしていないようだな・・・。

しかし、もう秋なのにまだミニスカートなんだな・・・。

寒くないのか・・・？

せめてウチに来るときは、ミニスカートはやめてほしいもんだ・・・。

華音のヤツ、美保をほったらかしてどこに行ってるんだ？

（さらにさらに次の日）

さて、いよいよ今日は中間試験だ。

「霧生、勉強したか？」

「したよ、だけど連立方程式の問題は分からなかった・・・」

でも、お前や夏菜というよりは勉強できたぞ。

（1時間目　数学）



「さらにさらにさらに次の日」

「さてと、テストも無事終わったな！」

「まあな、結果はどうか知らないけどな・・・」

「何だよモチベーション下がるな」

「まあ、勉強はそれなりにしたし、大丈夫だろ・・・」

「そうだそうだ、人生は気楽にいかないと！」

お前はお気楽すぎ。

「そっぴや霧生、お前鮎川とはどこまでいったんだ？」

「・・・え？」

## 12 普通の彼女

「お前、鮎川とはどこまでいったんだ？」

「……え？」

「……それはつまり、デートでどこへ行ったか聞いているのか？」

「んなわけねえだろ。どの辺まで進展したのか聞いているんだよ」  
「本能寺の変」

「ふざけないで答えろよ。どの辺までいったんだ？」

「……どの辺って、まだ何も起こってないぞ。」

「全然いつてないよ」

「マジか？ そりゃおかしいだろ。」

「高校生のカップルがすることって言ったら1つだ！」

「何だよ？」

「高校生だぞ高校生。17歳だぞ、もうすぐ18歳だぞ？」

「はつきりと言え」

「だから……」

「帰宅後 家」

「あいつはバカか？ まあ、バカなんだけど。」

「僕たちはまだ付き合い始めて間もないのに、いきなりそんなことできるかってんだよ。」

「それにそんなことしたら、みなみだって怒るだろ。」

「次の日」

「どうだ霧生？ ヤツたか？」

「まーだ言ってるのか。そんなにいきなりできるかっての」

「そんなこと言ったらいつまで経ってもできないぞ?」

「結構だね。　まだ高校生なんだからな」

「中学生なら早いかもしれないが、高校生ってのはそういうのをやりだすんだよ」

「ああそうかよ。　僕がどうしようと勝手だろ」

「いやいや、分からんぞ?　もしかしたら、

鮎川のほうもやりたがってるかもしれんぞ?」

それはない。　・・・はずだ。

別に今じゃなくてもいいと思うのだが・・・。

美保とかのエッチイベントが起きたら、いろいろアレんだけど、実際の彼女となると・・・、なんかやりづらいな・・・。

みなみも、あんまりそういうのは好きじゃないと思うんだけどな・・・。

・・・まあ、ゆっくりやっていけばいいよな。

ゆっくり好きなのところを見つけていこうって言ったのは僕だしな。

　　さらに次の日

「何だ霧生、まだエッチしてないのか」

「おい、あんまりそういうのデカい声で言うなよ」

「何でやらないんだよ?　もし俺に彼女ができたら、即行でやるぞじゃあ、お前に彼女ができないように祈っておくよ。」

「お前はそうだろうけどな、何か・・・、みなみはそういう感じじゃないんだよ。」

みなみは、純粋なイメージが僕の頭に染み付いてるんだよな」

「ふうん、でもどんなに純粋な子だって、いつかはやるもんだ」

「なら、別に今じゃなくてもいいだろ?」

「そりゃそうだが・・・、そうだ霧生。　いいことを思いついた」

お前が言ったことがいいことだった試しがないんだけどな・・・。

「またキャンプに行こうぜ！」

「はあ？ この時期にか？」

「まだそこまで寒くないから、大丈夫だろ」

「で、キャンプに行つてどうするんだよ？」

「はあ、分かつてないな。 だから現実<sup>じじつ</sup>は所詮<sup>しよせん</sup>現実<sup>じじつ</sup>なんだよ」  
何言つてんだ、この人？

「だからな？ 今回はお前と鮎川が付き合つてるとい<sup>い</sup>うのが前提<sup>ぜんまい</sup>なわけだ。

だから、そんな2人が、夜に一緒に過<sup>すご</sup>したらどうなるか……」

「流<sup>なが</sup>れでエツチしろつてことか」

「そういうこと」

「消え失せろ、このクズ以下の存在<sup>しんざい</sup>が」

何言つてやがる、このどアホが。

流<sup>なが</sup>れでやれるほど、僕のハートは強<sup>つよ</sup>くないんだよ。  
分かるか？ 所詮<sup>しよせん</sup>はチキン野郎<sup>やろう</sup>つてことだよ。

「じゃ、明日<sup>あした</sup>むかえにくるからな」

「おい、人の話を聞<sup>き</sup>いてるのかお前は」

く帰宅<sup>きたく</sup>後<sup>ご</sup> 家<sup>いへ</sup>

結局<sup>けつくり</sup>、キャンプに行くことになつちまつた……。

別にそこまでしてやりたいわけじゃないんだけどな……。

みなみだつてそういうのは望<sup>のぞ</sup>んでないだろうし。

まあ、キャンプを楽しめればいいか。

「ん？ お兄<sup>にい</sup>ちゃん、どっか行くの？」

「ああ、ちよつとキャンプにな」

「キャンプ？ 夏休<sup>かきゅう</sup>みにも行つてなかつたっけ？」

「ああ、まあこっちの事情があるんだよ」

「ふうん、最近お兄ちゃん機嫌いいね。恋人でもできたのー？」

「・・・え？」

「まあ、お兄ちゃんみたいな人を好きになる人なんかないよね」

「！」

「・・・悪かったな。」

とにかく、まずお前はみなみに謝れ。

『いやあ、明日はうまくやれよ、霧生！』

「やらねえよ、で？　今回もあのメンバーで行くのか？」

『まあな、明日も鮎川のお父さんが送ってくれるらしい』

「そうなのか」

『ああ。じゃ、また明日な。　うまくやれよ』

「やらないよ。　じゃあな」

白瀬のヤツは、そんなに強要して何がおもしろいのかね。  
自分だって同じ局面にあつたら、いろいろ困るクセに。

「さらにさらに次の日」

「・・・さて、僕はみなみのお父さんの車に乗っている。

今回もいろいろ起こりそうな気がするが・・・、

まあいいか。

今回は「女友達」じゃなくて「可愛い彼女」が一緒だからな。

そして、僕たちは前回と同じキャンプ場に着いた。

今回のキャンプで、僕たちと同様の出来事が起こった・・・。

### 13 普通の感情（前書き）

晃平「何かこの話パクリが多くないか？」

作者「気にすんな気にすんな」

晃平「・・・・・・」

### 13 普通の感情

ま、そんなこんなでキャンプが始まったわけだ。

キャンプもいいもんだけどな、今回はそうはいかなそうだ。

白瀬は僕とみなみを無理やりくつつけようとしていて、このキャンプだって、白瀬がセッティングしたんだよ。別にまだいいって言うてるのにな。。。

白瀬 「よおし、霧生。 鮎川とうまいことやれよ」

晃平 「ソウダネ、ソッチモガンバルヨ」

白瀬 「何でそうやる気がないんだ？」

晃平 「フツ、ズバリ言おう。 やる気がないからだ」

夏菜 「ていうか、何でこんな時期にしたのー？」

優 「白瀬に聞いてよ。 白瀬が持ちかけたんだから」

みなみ 「……………」

……まあ、僕は普通にキャンプを楽しむとしようかな。

だが、このキャンプで意外や意外な事が起ころうとは誰も知らなかっただろう。

たった1人を除いて……。

俊介「告ろうと思うんだ」

…………えっ…………えええええっ……。

何なんだこの状況は。

なぜゆえ僕がこんなカミングアウトを受けなければならないんだ。  
告るなら勝手に告つとけてっただよ。

まあ、僕も子供じゃあない。  
冷静に聞いてあげるわけだ。  
決して騒いだりはしないのさ。

晃平「ふうん。 誰にだ？」

俊介「浅井だ」

晃平「やめとけ、イカれたかカス」

俊介「なぜそのような罵倒を受けなければならない!？」  
いや、やめといた方がいって、絶対。  
悪い事言わないからさ、ホントに。

俊介「うつせーなあ、お前に浅井の何が分かるんだよ！」  
いや、少なくともお前よりは理解しているつもりだ。  
てか理解してるよ絶対。

晃平「で、何で僕に言うんだ？」

俊介「だからさあ、鮎川にかっこよく告白した

君のセンスを理解して・・・」

晃平「・・・空が・・・青いなあ・・・」

よし、薪集め再開だ」

俊介「待てえい!!」

晃平「ドーシタンダイシユンスケクン」

俊介「どうしたじゃねえよ! てか完全に棒読みじゃねえか!」  
だってお前にかかわるとロクなことないし。

俊介「でさー、どうしたらいいと思う?」

晃平「知らねーよ、んなもん勢いに任せりゃいいんだよ！」  
俊介「……………」

俊介「…なるほどー、勢いかあー」  
え？ 採用？

俊介「ありがとう霧生、おっしゃあやってやるぜい！」  
そうつって少年は駆けていった……………」

……僕は何も見てない、聞いてないぞ。

夕方

白瀬「涼宮八〇ヒの〇鬱」

……………」

晃平「…どーした、いきなり？」

白瀬「いや、突然言いたくなった」

……大丈夫なのかコイツわ……………」

夏菜「ではでは、高齢の夕食タイム！」

僕らはお年寄りか。

高齢じゃなくて恒例な。

晃平「恒例つつたつて、まだ計3回目だろ」

夏菜「何をおっしゃっていやがるんだ君は」

晃平「とりあえず日本語がおかしいぞ？」

夏菜「3回もやればそれはもう恒例なのだよ、ワトソン君」

何で急にホームズなんだよ。

夏菜「まったく。 そんなだから地獄ですつと掃除係なのよ」

晃平「どこの駆け。隊だそれは！ 僕は地上にすむ人間だ！」  
こんなバカ以下のヤツのどこがいいんだか・・・。

俊介「・・・・・・・・」

みなみ「・・・・・・・・」

白瀬「放。後。イータ。ム」

・・・・・・・・・・・・・・・・。。

晃平「・・・ほ、ホントにどうした白瀬？」

白瀬「いや、ただなんとなく」

大丈夫なのかコイツわぁーーーーー！

白瀬「じゃ、夕食後就寝タイムとかは・・・」

晃平「じゃ、って何！？ パクリの匂いがするし、

当たり前のことだし！」

白瀬「当たり前？ 俺は夕食後から8時間は寝ないぞ」

5時間・・・？

夕食後を8時だとすると・・・、

・・・・・・・・なんですとーーーーー！

朝の4時だとーーーーーっ！

白瀬「まあ、9時半くらいには食べ終わるな」

僕の予想を超えていたああああ！

5時半！ 異例の数値だ・・・。

白瀬「あはははは」

ロクに寝てないからこんな風に壊れたのか・・・？

く夕食く

白瀬「うん、意外と美味しい」

晃平「うん、意外に美味しい」

俊介「うん、普通に美味しい」

夏菜「どれもビミョーだけど・・・ありがとう・・・」

優「みなみどう？」

優「まあ、普通かな」

みなみ「中の上くらい・・・」

ひで「ないいつら・・・」  
↑お前もな。

白瀬「ところで霧生、忘れてないだろうなこのキャンプの目的」

晃平「んー？ 友情と交流を深める・・・」

白瀬「違っただろ」

晃平「別にいいだろ。そんなに焦なくなっただっていいって言うてんだろ？」

白瀬「お前がよくても、鮎川は・・・」

晃平「ない！」

白瀬「言い切れるか？」

晃平「・・・多分」

白瀬「とりあえず、お前らのためにテントを2つ用意してきたから

お前らは2人で過ごせ、いいな？」

なぜゆえ命令される？

く就寝時間く

夏菜「ん？ 何でテントが二つあるの？」

優「さあ？」

白瀬「細かい事は気にすんなって」

晃平「お前なあ・・・」

そして、望んでもいない展開で

みなみと2人きりになってしまった。

あ、先に言っておくが。

期待したところで何も無いぞ。

## 14 普通の誤解

引き続きキャンプに来ている僕たちであった。

～前回までのあらすじ～

「普通の感情」を読めば分かる。

というわけで図らずも1人の女の子と  
2人きりになってしまった・・・。

晃平「・・・・・・・・」

みなみ「・・・・・・・・」

ん？　そういえば、コイツ相当寝つきがよかったよな・・・。  
じゃあ、今夜もすぐに寝てくれるはず・・・。

～5分後～

・・・・・・・・。。

～10分後～

・・・・・・・・。。

～20分後～

・・・・・・・・。。

寝ねええ！　何で今日に限って寝ないんだよ！  
つか寝てくれよ！

こっちも気まずいし。

・・・ん？ 変に意識するからいけないんじゃないのか？  
・・・そうか！ 意識しなけりゃいいのか！  
ていうか、普通に会話あいてりゃ、そのうち寝るだろ。

晃平「・・・なあ？」

みなみ「・・・ふえ？」

晃平「そついやもうすぐ冬休みだっけなあ」

みなみ「うん、でもその前に試験があるけどね・・・」

・・・忘れておったああ！

こんなところでキャンプとかしている場合ではなかったああ！

晃平「・・・ま、まあとにかくだ。

冬休みになったら、どっか行くか・・・？」

・・・。。。。。

晃平「・・・あれ？」

スー・・・スー・・・

晃平「・・・寝たのか。 つくづくタイミングの悪い・・・」  
ま、いいか。

こんなこといつでも聞けるしな・・・。

翌日・・・僕たちが騒然とすることが起こった・・・らしい。  
じつはそれが起こったのは早朝で、

僕は例のごとく、みなみの寝息によって  
寝不足だったため、寝ていたのだ。

晃平「ああああ、日光が・・・しみる・・・もう終わりだ・・・」

白瀬「何言ってんだお前」

晃平「死神が・・・見えた・・・」

白瀬「誰が死神だ、誰が」

晃平「んで、何があっただよ？」

白瀬「それがスゲーおもしろくてな、俊介が浅井に  
告ったんだよ」

晃平「あのやろう、ついに壊れたか」

白瀬「いきなりヒドイな、お前は」

よく言われるよ、お前に。

白瀬「アイツさ、朝食のときに自分で恋愛の話に持ち込んで

そのあと自分が話す番になったら、思い切り

勢いに任せて告ったんだよ」

晃平「・・・な、なんだと・・・。僕がまだ寝ているにも係わらず

朝食を食べていたのか！」

白瀬「あの、そこか？ ツッコミ所は？」

晃平「で、返事はなんだって？」

白瀬「そこだよなあ、相手があの青野だもんなあ」

・・・え？

晃平「優？ 優に告ったのかアイツ？」

白瀬「え？ ああ」

晃平「夏菜に告るんじゃなかったのか？」

俊介「そうだったんだけど・・・あの、聞いてくれるか？」

・・なるほど、俊介の話をまとめると

俊介は勢いで告ったが、告ったときに目をつぶっていたため

俊介は夏菜のほうを向いていたつもりだったが、

実際には優のほうをむいていたという、

晃平「アホ極まりない展開だったとは・・・」

俊介「誰がアホだ！」

お前だよ。

俊介「で、どうしたらいいと思う？」

晃平「いや、普通に誤解を解けよ・・・」

で、俊介が誤解を解いている最中、

白瀬「霧生、昨日やったか？」

晃平「いんや」

白瀬「何い！ 誰のためにセッティングしたと思ってんだ」

晃平「いやいや、まず頼んでないし」

白瀬「まったく、意気地がないな」

晃平「無くて結構。僕はゆっくりと地道にやっていく予定なので」

白瀬「可愛げもないな・・・」

そして俊介は無事に誤解を解き、

告白は次の機会になった。

で、キャンプ終了。

あと、昨日みなみと話してて気づいたが、  
もうすぐ期末試験だな・・・ 勉強しなくてはならないな・・・

「次の日」

「霧生、期末試験だな」

「自分でやれ」

「くっ、なぜ勉強を教えてもらおうとしている事がバレた？」

「いつものことだろ」

「何かスゲーバカにされた気分だ・・・」

気分じゃなくて、バカにしたんだよ。

いやー、最近は平和だ。

あの妹との絡みもないし、

あの妹のあの友達との絡みもないし、

・・・そういえば何かで聞いたことがあるけど・・・

普段当たり前だったことが、突然起きなくなると

後で倍になって降り注ぐ・・・と。

・・・家で勉強しよう・・・

明日は・・・

うん、夏菜と白瀬でも呼ぼう。

うん、それがいいや。

しかし、やはりあいつは来てしまったのだった・・・  
続く。

#### 14 普通の誤解（後書き）

晃平「さあて次回は最悪なことになりそうだ」

作者「ヤケか・・・？」

## 15 普通の下着（前書き）

晃平「ん？ 今回は何だかずいぶんと嫌な予感が・・・」

作者「あー・・・気のせいだろ」

## 15 普通の下着

とまあ、なんやかんやで続いてしまったわけだ。  
もうエッチイベントは勘弁してほしい・・・。

前までみたいな状況ならまだ良かったが、  
今の僕には彼女がいる・・・。

その状況でのエッチイベントはマズイ・・・。

しかも最悪なことに、妹の友達が来てしまっている・・・。

忘れている人もいると思うので、説明すると。

きりゆうかのん  
霧生華音、僕の生意気な妹。見た目はまあいい方。

かみきみほ  
神木美保、妹の友達。可愛いがパンチラなどのイベントが豊富（泣）

さらに親がいない上に華音もいないから、

僕は華音が帰ってくるまで美保の側にいなければならない。

ああ、辛い・・・。

例のごとく、美保の服は長袖のセーターにフリルのミニスカートだ。  
唯一の逃げ場だった白瀬と夏菜は、今日に限って  
これないらしい。

つまり、完全に逃げ場を失ったわけで・・・。

しかしコイツ、ミニにもほどがあるぞ・・・。

こんなの履いてて、よく襲われないよなと思うぐらい超ミニなんだ。  
こんなにミニだったら目をそらしたって

絶対にスカートの中が見えるよな。

てか、現にもう見えてるし・・・。

まあ待て、落ち着け。

僕には彼女がいる。

しかも相手は中学生、年下だ。

別に見たって問題はない……。

でもなあ……、コイツちょっと動くだけで下着が丸見えになりそうになるんだよなあ……。

例えば、足を組みかえるだけで完全に見えてしまう。

例えば、ものを取るためにかがむだけで見えてしまう。

何より、何もしくたって見えてしまっている……。

まあ、夏よりはマシだ。

夏なんか、シャツが下着みたいだし、下着つけてないから中が見えそうになったりしたし……。

……ここで何か別のことを考えよう……。

あるところに駄目な少年が猫と暮らしていました。

猫はどら焼きがすきで、少年の面倒をよく見ていました。

猫には義兄弟がいて、頭にリボンをつけた妹が……。

ってこれ丸パクリだああ！

パクリはいかんぞ、パクリは。

ふう、しかし今ので落ち着いたかな。

『イ。ズマ。レ。ン』

「どうした、白瀬？」

電話の相手は白瀬だ。

『いや、ただなんとなく』

「ホントに大丈夫か、お前？」

『心配するな。もうすでに大丈夫じゃない』

ああ、そうかいそうかい。

『ところで、今何してるんだ？』

「目の保養だ」

『はあ？』

「これ以上は追求しないでくれ・・・」

で、ついに冬休みが始まろうとしていた。

## 15 普通の下着（後書き）

晃平「さて、今回の話はエロ以外に特に何もないという  
ずいぶんと作者の未熟っぷりが出ていたが・・・」

作者「うう、すみません。その代わり、次回は冬休み編なので  
長編にしたいと思います！  
いやー、もうすぐ進学するねえー」

晃平「冬休み・・・まさかまたエロシーンとか  
いれないよなあ・・・？」

作者「・・・・・・・・・・・・・・・・」

晃平「そこで黙るな！」

## 16 普通の冬休み 妹のトラブル（前書き）

久々に連載再開です。

同じく連載している「God Only Knows」? もよろしくお願いします。

## 16 普通の冬休み 妹のトラブル

『・・・とうわけで、皆さん、ケガのないように過してください  
僕はボーッと校長先生の話聞いていた。』

「はあー!!! いやいよ冬休みかあ！」

「お前はテンション高すぎ」

僕は舞い上がっている白瀬に1ツツコミ入れる。

「冬休みなんて何にもないよ」

「・・・お前は低すぎ」

やたらテンションが低い夏菜にも1ツツコミ。  
ていうか、テンション低すぎだし。

「何かあったのか夏菜」

「うーん・・・何となく学校に行けないってのがイヤなんだよねえ  
・・・」

「いやいやいや」

学校に行かないで済むなんていいことじゃないか。  
大体そんなこと言ったら夏休みのほうが相当長いじゃないか。

「さあて、霧生。冬休みに何する？」

「お前それ夏休みにも言つてなかったっけか？」

「いいからあ！ 何すんのっ！？」

何を興味津々に聞いているんだ夏菜よ。

「まあ今回は可愛い彼女さんがいらっしやるからなあ。

毎日毎日エンジンジョイするんでしょーなあー！」

「何か気持ち悪いぞお前」

「というわけで明日霧生の家に集合な」

またか。

もう慣れたからいいけどさ。

↓ 帰宅後 家 ↓

あーあ、ついに冬休みか・・・。

何をして過ごそうものか・・・。

・・・とりあえず明日は白瀬&夏菜が来るからな・・・。

・・・明日？

僕はとりあえず妹の華音に聞いた。

「お前、明日友達とか連れてこないよな！？」

「来ないけど・・・何で？」

めっちゃ嫌な視線で見てるんですけど・・・。

まあ、来ないならよし。

うん。

「言つとくけどさ、お兄ちゃんじゃあの娘は絶対ムリだつて」

「あーそうかいそうかい」

何を勘違いしたのか妹はそんなことを言い出した。

フツ、僕に彼女がいるとも知らずに。

「あー、でも明後日は来るから。  
友達とか連れてこないでよ？」

「・・・そうすか」

明後日はくるのかよ・・・。

心の中でそう突っ込んだ。

『冬休みだね』

「だな」

『冬休み中、何する・・・？』

「別に僕は何でもいいよ。遊び行ったりしたら楽しいかもな」

『そうだね。じゃあ、もう寝るね』

「ああ、おやすみ」

『お休みなさい・・・』

みなみとの電話を切った。

・・・そうか、今回は彼女いるんだよな。  
今更だけど。

・・・何か楽しみになってきたな。

～次の日～

僕は部屋で白瀬と会話をしていた。

夏菜はまだ来ていない。

「あーあ。やっぱり冬休みじゃテンション上がらんなあ」  
「何でだよ？」

「水着の女の子がいらないではないか」

・・・・・・。

あー、なんかもう、えと、そーっすね。

「別にどうでもよくないか？」

「何をぬかす！ 男にとって水着はとってもうれしいものなのだぞ！」

ぶっちゃけたな。

コイツ、いよいよ真の変態になってきたぞ・・・。

「よし霧生！ 決めたぞ！ 俺は冬休み中のいつかに温水プールへ行く！」

「行つてこい」

「お前も行くんだよ。フハハハ！ 俺たちの夢はまだ始まったばかりだ！」

あまり始めたくない夢だ。

「それより浅井まだなのか。せつかく腕を上げてきたのに」  
腕を上げたというのは多分ゲームのことだな。

「つかお前、鮎川と冬休みに何かするのか？」

「話題の転換早くね！？」

「気にすんなつて」

いやいや、あまりに早すぎて気にも留めんわ！

「で？ 彼女さんと何するんだ？ 今度こそやるんだろうな？」

こいつが言つ『やる』とはそういう意味だろう。

なので言つてやった。

「前にも言つたが今はやるつもりはない」

「そーだそーだ」

ほら夏菜もこう言ってるし……

夏菜ア！？

「やるつもりはないんだって。

・ ・ 何をやるつもりなの？」

「気にしなくていい。ところでいつの間に入った？」

「たまたま妹さんが家を出るところだったから」

？ 華音のヤツ、どこか行くのか？

・ ・ ま、いいか。

「よし浅井、勝負だ！！」

「よっしゃ来おい！！」

・ ・ ハア。

また僕は暇か……

|    |     |   |     |    |
|----|-----|---|-----|----|
| 白瀬 | 1 2 | - | 6 2 | 夏菜 |
|----|-----|---|-----|----|

・ ・ ・ えっと、先にいっておくけどこれは野球のゲームです。

・ ・ ・ 待て待て！？

白瀬の12点もスゴイけど、けど、けど、

何なの夏菜の62点って！？

夏菜が強すぎるの！？

白瀬が弱すぎるの！？

何が起こったの！？

「もうイヤだ！」

「へっへっへ全然弱いね白瀬くん！」

「くそ・・・」

がんばってください。

僕は宿題をやってます。

「代打！ 霧生！」

「待て待て！ 見る！今宿題してるの俺は！」

「いいじゃねえかそんなくらい」

「よかねえよ！」

何なんだこいつらア！！！！！！

白瀬      13      -      87      夏菜

で試合終了。

「乾杯だ・・・」

「完敗だろ・・・」

「はっはっは！ 弱いねー二人とも」

くそ・・・鬼だ！

「そうそう、さっき霧生と温水プール行こうぜ的な話してたんだけど、皆で行こうぜ」

「いーよ」

軽いな、オイ。

「となると人数の調達を始めないとだな」

「おい、ホントに行く気か？」

「当然だろ。俺がウソなんか吐くか」  
ウソは何回か吐いてるだろ。

・・・あ、そういえば明日華音が友達くるとか言ってたな・・・。  
アレは避けないと・・・。  
僕は、唯一の回避方法に言った。

「白瀬、明日はお前の家で遊ぼう」  
「え？」

「何で何で？」

「な、何となく。いいから明日は白瀬ん家な！！ 分かったな」

「別に俺は構わないけど・・・」

「まあいいんじゃない。たまにはさ」

物分りのいいヤツらで助かった。

あのイベントだけは避けないとだからな。

「じゃ、帰るわ」

「ああ、何か名残惜しいな・・・」

「気持ち悪いぞお前」

気にすんな。

「じゃ、また明日な」

「おう」

「じゃーねー」

旧友たちは去っていった。

・・・今日は華音もどつか行つてたし、  
美保も来なかったから良かった良かった。

が、エロイベントが僕を見逃すはずもなかった・・・。

見逃してほしかったけど！

さあてというときに、俺はリビングへ降りた。  
するとどういうことだろうか、

女性用の下着がそこに放置されていた。

・・・ピンクか。

・・・じゃない！

そうじゃない！

今この状況下で女性用の下着を所有しているのは・・・

妹、華音しかない。

つまり、この下着は華音のつてことか・・・。

別に妹の下着なんぞに興味はないが、

この状況はマズイ！ 社会的に！

そもそも何で下着だけ！？

・・・思ったが、よく見ると周りに

Tシャツやホットパンツもあった。

あと、帽子も。

そして、シャワーの音が聞こえることから推理すると・・・。

華音は俺がまだ上にいるものと思い、  
帰るや否や、服を脱ぎ風呂場へGO。という感じが・・・。

しかし中学生ともなるとやはりブラジャーは着用しているのか。  
ふうん。

よく見るとパンツにもうつすらシミらしきものも見えるし。  
ふうん。

・・・・・・待て待て、今の俺は彼女持ちだし、  
ましてや妹、親族の下着なんて興味ない・・・・・・。

・・・・・・わけではない・・・。

現に、ちよつと興味沸いてる自分がいる・・・。  
だって、いくら妹のとはいえ  
女性の下着を目の前にしたのは初めてだ・・・。

まだシャワーの音は聞こえる・・・。  
華音はまだ風呂か・・・。

・・・・・・。

どうする？

少しだけ？

少しだけなら大丈夫か？

しかしそれは人としてどうなんだ？

考えているうちに、気がつくと僕はそれを手にとっていた。

ちよつと汗をかいていたらしく、少し湿っている・・。

そしてそれを鼻の近くへ運ぼうとしたが、

シャワーの音が止まったため、僕はすぐにその下着から手を離れた。

「・・・・・・・・危ね・・」

危うく未知なる世界へ入るところだった・・。

が、状況は解決してはいない。

妹の下着を目の前にして直立している僕を見て華音はどう感じるだろうか。

少なくとも好感は感じられない。

何とかしないと！

まずこの部屋にいる時点でマズイ！

とりあえず部屋を出る！

ガチャ

「あ」

部屋を出たところで、タオル1枚の妹と鉢合わせしてしまった。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

つい胸元に目がいったが、僕はすぐに2階へ逃げた。  
・・・ヤバイな。

僕、少しシスコンっぽくなってしまっているかもしれない・・・。

こうしてドタバタの冬休み1日目は幕を閉じた。  
その日はずっと気まづかったことは言うまでもない。

16 普通の冬休み 妹のトラブル（後書き）

Next ・ 「17 普通の冬休み またもトラブル」 です。

お楽しみに。

## 17 普通の冬休み その友人のトラブル（前書き）

晃平「この小説って、もうダメだな」

耕也「そうか？ 羨ましい限りなのに」

晃平「えっと・・・誰？」

耕也「俺は竹内耕也、この作者が連載してる作品の

『God Only Knows』『God Only Knows?』の主人公だ」

晃平「あのクソ作者・・・ついに宣伝し始めたな・・・」

耕也「今回から俺と一緒にやっていくぜい」

## 17 普通の冬休み その友人のトラブル

さて、今日は白瀬の家に行くことになりましたでござるよ。  
フッフッフ、今回あのエロトラブルメーカーはいないからな  
ゆっくりと遊べるな。

・ おかげで宿題は全然なんだけどな。

「よ！ よくきたな。まあ上がれ」

「おっじゃましーすー!!」

「お前はテンション高すぎだよ」

まあ白瀬の家も久々だしな。

・ ・ ・ そっぴや、夏菜も小学校から一緒だけど  
家には行ったことないな・ ・ ・

・ ・ ・ まあいいか。

「へえー、白瀬くんの家つてもうコタツ出てるんだ」

「浅井んトコは出てないのか？」

「うん、まあね。おかげで寒いんだよ。今日はコタツ堪能するぞ」

「！！！」

コタツではしゃぎすぎだろ・・・。

いや、僕がテンション低いだけなのか・・・？

とりあえず僕はリビングへ向かった。

このとき、僕が靴を脱ぐとき、  
気づかなかった。

あの悪魔の靴があることに・・・。

「よっしゃ浅井勝負だ！」

「こりないなあ。いいけどね」

「頼むから僕をのけ者にしないでください・・・」  
「・・・トイレ行こ・・・」

トイレで用を済ませて部屋へ戻ると、

勝負の決着が着いていた。

どちらかが勝ったのかは・・・まあ言わなくても分かるかな？

「あああああああッッッ！！！！！」

「ハッハー、残念だったね」

あーあ、ここにいる集団はバカばかりじゃないか。  
「・・・・・・・・・・」  
「どうでもいいけどさ。」

「お前ら宿題やんねーのか？」

「俺がやるわけねーだろ！」

元気のいい返事されてもなあ……。

「夏菜は？」

「もう終わったけど？」

へえ。

「……じゃねえよ！は！？ もう終わったのか！？」

「うん」

うんって言いやがったコイツ！

はあ！？

冬休みが始まったのは昨日で、しかもお前らウチに来てたよな！？

何がどうなってんだ！

やる暇がねーだろ！

「だからさあ、冬休み始まる前に配られた宿題は全部終わらせて、  
一昨日配られたのは昨日帰ってから済ませたよ」

……超人か……

いや、ここまでくると僕たちがおかしいのかと疑ってしまう……。

すると白瀬が言った。

「あー、化身出してー」

……はあ？

「白瀬、お前ついにイカれたな？」

「元からだと思うけど」

お前結構冷酷だな、夏菜。

「いやー、だって化身出したくね？」

「すまん、何がどうなってそうだったのか分からない」

多分作者の影響だろうが。

「どうでもいいけど、今から何すんの？」

「……」

それを考えてなかった。

今から何をしよう？

宿題をするにしても、宿題は家にあるし  
取りに行くのもアレだし。

「じゃ、どつか逝く？」

それしかないな。

あと夏菜、『逝く』じゃなくて『行く』な。

「よし、ではどこへ行くとか皆の衆」

「デパ地下で試食めぐり」

「主婦か！」

何だこのやり取り、漫才かよ！

なんだかんだでゲームシヨップへ行くことに。

夏菜の提案なんですけどね。

「では出かけるから準備をするのだ皆の衆」

お前は何なんだ。

「って言っても、別に着替えるわけでもないし、財布はあるし」

「だな、じゃあ行くか。トイレに」

「オイ」

ったく、まあ出かける前に行つといた方がいいか。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

「夏菜、まだか」

「まだ」

「・・・・・・なんでこうも女のトイレは長いんだろう・・・。  
訳分からん・・・・・・・・。」

「しゃあねえ、2階のトイレ使つか」

「2階にもトイレあるのか？」

「まあな」

・・・・・・・・。。。

「コレ」

「ずいぶんと古ぼけてるな・・・。」

目の前にあったトイレのドアは結構ガタが来ているようだった。

「じゃ、俺入るから。2、30分はかかる」

「何で!？」

「まあ・・・気にすんな」

「・・・・・・なぜ30分もかかる・・・？」

「10分くらい後」

「・・・・・・全然出てこないな・・・。」

ホントにこりや30分はかかるな・・・。

「・・・そういや2階って白瀬の部屋があるんだっけか。  
ちよっと入ってみるか、懐かしいし。」

・・・？

「あれ？ この辺じゃなかったっけ・・・？」  
しまったな、どこだろう。

薄暗いし、よく分かんないな。

で、昔の記憶を頼りに何とか部屋の前にたどり着いた。

・・・ここだけホコリがないな。

掃除してんのか・・・？

ガチャ

「・・・」

・・・この部屋・・・

・・・ホントに白瀬の部屋か・・・？

そんな感じしないし・・・女のにおいするし（直感とかじゃなく、ホントに）。

・・・出よう。

出たほうがいい気がしてきた。

この家に女は白瀬のお母さんしかいないが、  
例外を含むのなら、休み期間中に遊びに来ているアヤツも含まれる  
からな。

しかし、今日は留守でよかった。

その油断が命取りだった。

僕が部屋を出ようとして後ろを向くと、  
どっかに出かけるような格好をしている女の姿が。  
おそらくこの部屋に居たであろう人物だろう。  
そしてその女とは皆さんの期待を裏切らない  
『神木美保』だった。

．．．．コノヤロウ．．。

「．．．．な、何してるんですか．．．．？」  
「え？」

そうだった。

今の状況を忘れていた．．。

今の僕は女子中学生の部屋に勝手に侵入した変態ではないか．．。  
．．しかし、ココは白瀬の部屋だった気が．．．。

「えっと、何かここ白瀬の部屋っぽいなぁ」と

「えと、おにいの部屋ならソコですけど．．．」

美保はこの部屋のとなりにある扉を指して言った。

．．白瀬って『おにい』って呼ばれてるのか。

「そーなの．．？　ココだと思ったんだけど．．．．」

「．．．．と、とりあえずこの部屋は私の．．．」

そう言つて美保は部屋に入ろうとする。

とりあえず、ここは逃げるのが良作だ。

美保が部屋に入ったところでスルリと交わし、

逃げさる。

フッフ、これでいいっつ。

と、そのとき。

ステ

「エエッ!？」

「キヤアッ」

ドサ

効果音でだいたい想像がつくと思うが、  
美保がコケた。

ただコケるだけならまだしも、  
僕の上に倒れてきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「うゝゝゝごめんなさい」

美保はこうとして体を動かすが、  
余計に絡まるばかりである。

何でこうなるかね。

そして胸が当たってるのだが。

美保が動くたびに感触が伝わるのだが。

やがて僕たちは完全に絡み合っていた。  
ほどけないなこりや・・・。

モガモガと動かしていると

やがて僕の足が生暖かい部分へと触れた。

「ひぁ・・・ぁ・・・」

「お、おい・・・変な声出すなよ・・・」

「だ・・・って・・・ぁ・・・」

いいから早くどけよ！！

「ぁ・・・当たって・・・る・・・」

「当たってる・・・？」

なんとなくいやな予感しかしないのだが、僕は美保の方を見た。

案の定だった。

僕の足が美保の・・・その、つまり・・・ソコに触れていた。どおりで生暖かいはずだった。

いや、それどころじゃないよ！

いい？

年頃の男が、

年頃の女の子と

服を着ているとはいえ、完全に絡み合っている。

分かるよね？

いったいどうなるか・・・。。。

「ぁ・・・何か・・・お腹に・・・当たっ・・・」

「いいから、早くどいてくれ！！！！」

必死に叫んだ。

下に聞こえないくらいのボリュームで。

「これ．．．．．もしかして．．．．．」

「あああああああああああああああああああ！！」

美保はソレを改めて再確認したのだろう。

もう一度叫んだ。

「キヤアツ！」

「僕が叫びたい．．．．．」

何とか時間を掛けて危機を脱した僕たちは  
ひとまず落ち着くまで静止していた。

なぜかお互いに、正座して。

「．．．．．」

「．．．．．」

そりゃお互いきまずいだろうな．．．。  
いろいろとアレだし．．．。

すると、美保が話を切り出した。

「あの．．．．．」

「ん．．．．．？」

「．．．男性のつて、皆あーなるんですか．．．？」

「それについてはもう触れるな！！」

さっきは嫌そうだったのに

何で今は興味津々な顔で聞いているんだよ！！

あーもう、ここまできたらいつそ襲ってやろうか。

「せんぱいは、女の子については興味ないんですか？」

「待て待て、あったとして何する気だ・・・」

「な、何もしませんよ・・・！ 聞いてみただけです・・・！」

「興味はあるよ」

彼女いるし。

「でしょうね・・・」

「オイ、でしょうねって何だ」

「興味あるからさっき・・・」

「もういいって！！！！」

今までで一番最高で最悪なエロイベントであった。

そんなこんなで僕たちはでかけることに。

・・・何か、この小説ってエロが中心になってきてね・・・？

17 普通の冬休み その友人のトラブル（後書き）

耕也「羨ましーなー!!」

晃平「お前うるさいんだな」

耕也「だってあんなイベントの連続は羨ましいだろ！」

晃平「そう？」

耕也「たりめーだ！ 男のロマンだよ！」

晃平「ロマンねえ・・・」

18 普通の冬休み 男のオアシス（前書き）

耕也「あー羨ましい」

晃平「何が」

耕也「お前に起こるイベントだよ！

マジ羨ましいわー！！！」

晃平「いいことばっかじゃないと思うんだがなあ・・・」

## 18 普通の冬休み 男のオアシス

なんだかんだで僕たちは出かけることに。  
でも行き先がまだ決まっていらないのだ。

「で、どこ行くのー？」

「さあな。どうすんだ白瀬」

「うーむ・・・ところで、お前ずっと何やってたんだ。

俺がトイレから出てきたらトイレの前にはいないからビビったぜ」  
まあ、いろいろあったんです。

「とりあえずお腹すいたねー」

「ん？」

そついや僕たち昼飯がまだだっけか。

「じゃあ最初に何か食っていくか」

「やったー」

軽いヤツ。

10分後、僕たちはとあるファストフード店にいた。

「とゆーわけで、これから何をするかを考えようの会を開きたいと

思います！」

「第2回はもう無さそうな会だな」

「お目が高い！」

別に褒めちゃいねーんだけど。

「で、何する？」

「結局決まってるのね」

「あたりめーだ、何のための会だよ」

出来れば開きたくない会だがな・・。

「では一人ずつ聞いていこう、僕はどこでもいい。夏菜は？」

「私もどこでもいいーかなあ」

「俺は女がいっぱいいるところ」

・・・・・・。

で、女がいっぱいいるところに決定しました。

仕方ないだろ、どこでもいいって言ったやつは

行きたいところがあるヤツに優先されるんだから・・。

「で、どこに行くんだよ結局」

「水着がありや温水プールに行くんだけどなあ」

オイ。

「あ、私体動かしたくなってきたな」

「よしよし、じゃあ夜の・・・」

「僕の幼馴染みに何する気だ、ええ？」

「冗談だって冗談・・・」

殺すぞコイツは。

「バッティングセンター行こー!」

「バッティング?」

「これまた古風な……」

?

「いいね! バッティングセンター行こうぜえ!」

「待て、なぜ急にやる気全開なんだ」

「気にすんなって!」

どうせまた不純なりゆうなんだろうけどな……

まあ僕も体は動かしなかったし、丁度いいかな。

「そろそろ俺が行く気になった理由を教えてやろう」

「はいはい」

でも、あらかた想像つくよ。

「バッティングセンターでミニスカの女の子がいたらいいなーとか思ってたんだろ?」

「惜しいな。ミニスカまではいいんだが、そういう子がバッティングするところがいいんだよ」

何それ?

「上手くいけば……パンチラが拝めるぜ……フハハ」

「もうコイツ変質者だな……」

盗撮とかしてんじゃないの? コイツ。

ホントにやりそうで怖いんだけど……

「バッティングセンター」

「とりゃあー!!」

バスン!

夏菜のやつ、ありゃダメだな。

完全は大振りだな。

・・・まあ格言う僕も・・・

ポコン!

ボテボテ・・・

「全然ダメなんだけどな・・・。

白瀬、お前はどうか・・・?」

「静かにしてくれ・・・今あの子を見てるんだよ・・・いいスカ

ートだな・・・」

「怖いよ、お前」

「どれだけ飢えてるんだよ・・・。

くで

「結局金使ったのは僕と夏菜だけかよ」

「金を使わずに楽しむのが頭のいい使い方だ」

「頭のいいやつはパンチラを狙ったりしないけどな」

「あ、そうそう。さっきの子、白だったぜ」

「見えたんかよ!!!」

「しまったな、よくみたら浅井もミニじゃないか!」

「待て待てつつこみ所が多すぎるぞ。」

よく見ないと気づかないのか？　そして何をする気だった！？」

「保健体育の実習かな」

「どストリートなのか遠まわしなのかよく分からんな・・・」

「でー、どうするー？」

「まだ2時半・・・けっこう余裕あるぞ」

「うーん・・・女が居るところ・・・」

「それじゃないとダメなのか？」

「まあ白瀬くんだからね」

その納得の仕方はどうかと・・・

くでく

「ま、ここは無難にイ○ンだな」

「だろうな」

「でもやっぱりここ広いねー、どこ行くか迷うや」

「や、ここは無難に本屋だな」

「本屋ア？」

「ああ、絶対に本屋」

「別にいいけどさ」

「私もファ○通読みたいからいいよ」

こんのゲーマーが・・・。

お、ラッキー。

新刊が出ているではないか。

僕もいよいよツイてきたな。

よし、これは買わねば！！

「・・・あれ、１００円足りない」

・僕のツキもここまでか・・・。

「白瀬、悪いけど１００円・・・あれ」

白瀬もいない・・・。

本格的にツキがなくなってきたぞ・・・。

くで

結局僕は本を買うことができなかったのです。

くそ・・・白瀬さえいれば・・・！

アノヤロウどこで何やってるんだ！

「ん？」

いた。

あそこでニヤけてるのは・・・

間違いなく白瀬だ。

「何やってんだ」

「がヴあうるけちよがア!？」

「人語を話せ人語を」

「何だ霧生か、脅かすなよな」

脅かしたつもりは無いんだけど・・・。

つか何やってんだマジで。

「こんなかってどうなってるのかな、きりゅー？」

「なぜ急に棒読みなんだお前」

「わーきになるなあ、はいつてもいいのかなー」

僕と白瀬の前には暖簾のれんがひとつ・・。

いわゆる「18歳未満は入ってくんじゃねーよボーケ」ということだな。

コイツそうまでしてこの中に入りたいのか？

「よーしきりゅー、はいつてみよーか」

「分かった分かった。分かったから棒読みはやめろ」

くで

「来たぜ来たぜ、魅惑の空間に！！」

「つつてもここ、エロDVDとかエロ本とか置いてあるだけだろ」

「何を言うか！ この部屋にはサンプルなるものがあるんだぞ！」

「サンプルだあ？」

こいつホント懲りねえな・・。

「ほらほらここにあるパネル、これでAVのサンプルが見れるんだぜ」

「詳しいな」

お前ホントに初めてここ来たのか？

「一人じゃなかなか来れなかったが、お前がいるからな」

「一人で行ってくればよかったのに」

ていうか、100円だけ借りて本買いに行つてりゃよかったな僕。

「さあゝて、どれ見ようかなゝと」

「見るの！？ここで!？」

「んー・・確かにいきなりAVはアレだな」  
「どれだよ。」

「ここはエロ本から閲覧しておくか」

「お前さらつとスゴいこと言うよな」

「お、この雑誌の付録、下着だつてよ！買おうぜ！」

「マンガ一冊買えないやつに買えると思うか？」

「何とか」

「いやムリだろ！」

「大体下着が付録って・・・そんなのどうすんだつての。」

「おい霧生！これヤバイ！」

「何だ？」

「見ろよこれ！このポーズ！この格好！エロ以外の何者でもない！」

「お前はもう、もはや変質者だよ」

「このOL、週5で。。。するらしいぜ」

「それを知って何になるというんだ」

「あー、エロ本だけで結構楽しめたな」

「できればもつと別のことで楽しみたかったよ」

「さてさて、お待ちかねのAVだ！」

「デケエ声でんなこと言うな!!!」

くで

「激カワ現役高校生に・・・」

「頼むから読むな、いろいろと問題が発生する」

「いいだろ別に。さ、これにするか！」

「僕、出たい」

「出てつてもいいぜ、俺はもう慣れた」

「そか、じゃあな」

「おう！！！！！」

あ。

「白瀬、100円貸してくれよ」

「やだ、これを買えなくなる」

・・・買った・・・！？

18 普通の冬休み 男のオアシス（後書き）

耕也「作者に最近いいことがあったんだとさ」

晃平「別にどうでもよくね」

耕也「頼むから、俺にももうちょっと・・・」

あんなイベントが欲しゅうございます・・・!-!」

晃平「飢えてるなあ・・・」

## 19 普通の冬休み アツい冬休み（前書き）

耕也「どうでもいいが最近作者の投稿が偏ってるぞ」

晃平「ホントどうでもいいんだけど・・・」

耕也「ま、どうせまた悪いことでもあつたんだろうけどな！」

晃平「マジどうでもいいんだけど・・・」

## 19 普通の冬休み アツい冬休み

僕は暖簾をくぐり、あの空間から出た。  
中からは 女性の喘ぎ声 が聞こえる。

さて、100円を無理やり借りたことだしマンガを買いに行くかな。

くでく

「あー買った買った。これマジで読みたかったんだよなあ」  
うれしさでもう死にかけそうだな。

ん？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「夏菜、何やってんだ？」

「ゲーム、さっき買った」

スゴ！

コイツもうほとんどクリアしてる！

え、そんなに時間経っちゃってた！？

「晃平もやる？」

「いえ、いいです」

あなたには到底及ぶ自信が無いので。

「あゝゝゝ、最高だった」

「おかえり、何してたの？」

あ、それは聞かないほうが・・・。

「聞いてくれよ霧生、お前が出て行ってからさ、女の子が一人きたワケ」

「ふうん、で？」

「同じ年くらいの子でさ、めっちゃＡＶに興味津々だったワケね」

「ふうん、で？」

「で、ちよつと居づらくなつて、出てきたワケね」

「もう区切らなくていいから、早く言え」

「あゝ・・・ちよつとこつち来て」

何だよメンドくさいな。

「何でこつち来たんだよ」

「浅井の前じゃ言えないからな」

「お前ついに殺らかしたのか」

「いやいや殺つてないし!？」

じゃあ何だつてんだよ。

「で、やっぱりエロ本をもう一回見たくなつて、また入ったんだよ」

「なるほど、で、どうしたんだ？」

「聞いて驚くなよ？」

もったいぶらずに早よ言え。

「その女の子がモゾモゾしてて、何してんだろと思って

反対側に回つてみたら・・・その子、スカートの中に手突っ込

んでて・・・」

・・・なるほど。

「それでそれで？」

「いきなり食いつきよくなっ たな・・・」

「気のせいだ、それでそれで？」

「手を動かしててさ・・・まだいるかもな」

「マジで？」

見たいかも。

「よし白瀬、今すぐ行こう」

「何で急にノリノリ！？」

「いいから行くぞい」

別にノリノリなんかじゃないぞ。

白瀬がウソついてないか確かめるだけだ！

くでく

「さっきまでいたAVのトコ・・・あ」

「え？何だとした？」

「・・・まだ居る」

「ドコドコ？」

「アソコ」

白瀬が指差すほうを見るとやはり女の子がいた。

あの子か・・・。

ん？

「おい白瀬、あの子ウチの生徒会にいる子じゃないか？」  
「え？」

確か副会長をやったような・・・。

「・・・間違いないな、俺もあの顔は見たことある」  
それで気づかなかったんだ。

「三ノ宮<sup>さんみや</sup> 結<sup>ゆい</sup> って名前じゃなかったっけ」

「そうそう、その子だ」

へえ・・・あの子が・・・。

あの子結構可愛いもんな・・・。

「よく見えるトコにいこうぜ霧生」

「あ、ああ」

僕たちは彼女の顔が見えるところまでいった。

「やっぱり三ノ宮だ」

「見ろよ、スカートの中に手入れてるだろ？」

「誰か来たらどうするつもりなんだ、あの子」

しかし、ここからでも確認できる。

スカートの中に手を入れてるだけでなく、手をモゾモゾ動かしている。

そして時々・・・

「ん・・・」 とか 「あっ・・・」 とか

言ってるところを見ると、三ノ宮がやってることは一つだな。

「しかし、あの子マジメそうな子なんだけどな、白瀬？」

「クッククックク・・・」



「どーする夏菜、お前もまだ暇だろ」

「うーん、どうしよか」

「じゃーね、こうなったら……」

$$\frac{\sim}{\sim}$$

「やつぱ家でゲームだろ」

結局そうなるのね。

「見よこれを！」イナズマイレブンストライカーズ！」

「待て待て！？」  
「せめてちよつとは伏字とかしろやコリア！」

「いいじゃん別に。これで対戦しよう」

[illegible]

このクソ作者が・・・。

ちよつとは読者の皆様のことを考えろつつの……。

ホットガールズ VS デストロイ・Ω

な、何か両方ともすさまじい名前だな……。  
で、デストロイ・Ωって……。

「ハッハー！俺の『ホットガールズ』でぶっ潰す！」

「ええ！？あのチームお前の！？」

名前に絶対お前ではないと思っていたのに！？  
同じ理由で夏菜も！

「私のデストロイ・Ωでぶっ潰してやるわ〜！」  
「お前が言つとマジ怖エよ〜！」

キックオフ  
試合開始！

「いきなり喰らえエ！ 『ジ・ース』！  
いきなりすごい名前の技だな！  
僕はよく知らんけど、何かすごい！！

「白瀬くんはまだ甘いよ！ 『ハ・ボル・ージ』！」  
「くそつ、弾かれたア！」  
「つしゃあ、反撃開始い！」  
「頼むからもうちょっと静かにゲームしてくれよ！」  
「何で実際に技名を叫んでんの！？  
アホ？ アホなの？」

「『デス・ピ・ー』！」  
技名えげつな！！

「『義の鉄』！ 何、破られた！」  
夏菜怖ッ！  
強いし！  
あと白瀬弱ッ！

「トドメよ！ 『○ッグ○ン』！」

ヴィッグヴァン！？

待て待てとんでもねーなオイ！

稲妻魂こもってんなオイ！

「止めてみせる！」

ねえ、こいつらバカなの？アホなの？ウスラバカなの？

「『オメガ○ザ○ハンド』！ くそつ、負けた！！」

ヴィッグヴァン強っ！

てか白瀬！

そこを伏せ字にしたら意味が無いだろ！！

ホットガールズ 0 VS 7 デストロイ・Ω

「クソツ、強い・・・強すぎるぜ浅井・・・」

「フハハハハ！ 甘い、まだ私には到底及ばないわ！」

何の会話ですか・・・。

「霧生！」

「何だよ」

「明日、行くぞ！」

「どこにだよ」

「温水プールだよ！」

「勝手にしろボケ」

今日は一番騒がしかった気がした。

19 普通の冬休み アツい冬休み（後書き）

耕也「やっぱり作者のやつ、いやなことがあつたらしいぜ」

晃平「あの作者イジメられてんじゃ・・・」

耕也「いくらなんでもそれはねーだろ、

でもやっぱり悪いことなんだろうなあ」

晃平「ガチでどうでもいいんだけど・・・」

## 20 普通の冬休み とある二人の接触（前書き）

耕也「やっぱり試験前はきつい」

晃平「あのクソ作者、試験前なのにこんなことやってんのかよ」

耕也「あーうらやましい」

晃平「まだ言ってた!」

## 20 普通の冬休み とある二人の接触

ピンポーン

「・・・チツ、何だよ白瀬朝っぱらから。殺すぞ?」

「いきなりヒドすぎんだろお前は!」

「だって、まだ10時半だぜ?」

こんな時間にきやがって。

マジふざけんなよ。

冬休みだつてのに僕はまだ彼女と会ってすらないんだぞ。

「昨日言っただろ、温水プール行くって」

「・・・ハア!?」

え、何、あれ本気だったの!?

正気の性かコイツは!

「さ、行こうぜ!」

「ぶっ殺すぞカス」

「相変わらず毒舌が過ぎるぜ霧生、今ので俺のライフはゼロだ」

「いつそマイナスにしてやろうかテメエ」  
「ヤメテクダサイ」

「早く行こうぜ霧生・・・!!」  
「あんなア、今どうみても宿題やつてるだろ」  
「朝からでかけて行きたいんだよ俺は!」  
自分勝手にもほどがあるぞコイツ・・・。

「前からお前に言いたかったんだが、なぜそんなにプールに行きたい?」

「いやいや、聞くまでも無いだろ。俺は女が好きだからだ」  
「サイテーだなお前」

「・・・仕方ねえ、宿題は帰ってからやろう・・・。

くでく

「ヒヤッハア!!!!!!」

「やかましい!」

「ゲハッ!」

殴っただけだっつーの。

つたく、うるせーなコイツ。

「来たぜ来たぜ来たぜキタゼエ!」

「落ち着け、いろいろとおかしくなっている」

「これが落ち着いていられる力!」

何なんだコイツは・・・マジで。

「温水プール、プールだゾ！中に入れば水着の女の子がいっぱいいるはずだ！」

「お前大丈夫か、いろいろな意味で」

「大丈夫だ！よし、行こうぜ！」

何かもう壊れてるなコイツ、救いようの無いバカだわ。

くで

「おお・・・霧生、思いのほか女の子が多いぞ・・・」

「あーそうツスねえ。まあいいんじゃないね、お前は」

「よし、では魅惑の探検タイムだ！」

「勝手にせー」

「何言つてんだ、お前もくるんだよ」

「えええええ・・・？」

ブクブクブク・・・

「何をやっているのかねコイツは」

「ブハア！霧生！もぐってみろ、絶景が広がってるぞ！」

「絶景だア・・・？」

「・・・もぐるか。」

ブクブクブク・・・

「ブハア」

「どーだった、霧生。さっきの白ビキニの子」

「んー、まあいいんじゃないかあ？」

「クッククク、わかってるぜ霧生。やっぱ興奮すんなあ」

「そんなんじゃないけどよ」

・・・多分。

「よし霧生、俺はある作戦にでるぜ」

「作戦？」

「おうよ。まず女の子にぶつかるんだ、それでいろいろな子と接触する！」

「今の接触という言葉に何か深い意味が隠されていそうなんだが・

」

「気にするな！行こうぜ！」

「よし、ここだ。こんなに人が多けりや気づかれまい、ククク」

「待て、何をする気だ」

「ノープログラム」

「ノープロブレムだろ、それだと計画がないってことだぞ」

「気にするな、いこうぜ！」

2度目だろそのセリフ。

「ぶつかつたと見せかけて、お尻に手を・・・」

「お前何をする気だ！？ 痴漢は犯罪だぞ！」

「痴漢ではない、今から起こるのは事故だ」

「予言してる時点で事件だろうが！」

「いいから見てろ、うまくやってみせる」

その発言はもう自白だよな？

「・・・ふう」

僕は温水プールに温泉のごとくつかっていた。

「やっぱり温まるわぁ」

「だな」

「お前いきなり隣に来るなよ」

「霧生、俺マジすげえことやっちまった」

何だよそれ。

「あそこにビキニの子がいるだろ？水色のボーダーの」

「・・・ん、ああ。いるな」

「俺さ、違う子のお尻触ってたときに見ちゃったんだよ」

「お前今さらつとんでもないこと言わなかったか？」

「実はさ」

無視かおい、無視なのか。

「あの子がポロリしちゃってるの見たんだよ」

「つまりどゆことだ？」

「だから、あの子のおっぱい見たってこと！」

「マジか！」

コイツ、ついにやりやがったな・・・。

「あの子が水の中から飛び出してきた瞬間にブラが外れたんだよ。」

あー、運がよかったあ

「くそ、少し羨ましい・・・」

「・・・？」

「どうした白瀬」

「おい霧生、あれ見てみる」

「あれ？」

白瀬が指差した先には1組の男女がいた。  
でも人が多くてよく見えないな・・・よく見えるな白瀬。

「霧生、これはちかくで見る必要があるぜい」

「何で急に目を輝かせてるんだよ」

「あの二人、ひよつとしたらエッチしてるかもしれないぜ・・・」

「んなバカな」

こんな人の多いところですからわけねーだろ。

くで

僕たちはその二人組に近づいた。

他の人たちはギャーギャー騒いで遊んでおり、まったく気づいていない。

そしてその二人組を見ると、

二人とも体をこちらに向けてじゃれ合っていた。

「何だ、やっぱりじゃれあってるだけか」

「いや霧生、甘いぜ」

「何なんだよお前は」

「俺たちの究極技『もぐる』を使うんだ」

「『はねる』並に役に立たなさそうだな。

ま、とりあえず潜った。

するとどうだろうか、その二人組は下半身のみを動かしていた。

「え？」

「睨んだとおりだ、もうちょっと近づくぞ、この人の数なら気づかれまい」

「お、お、お。」

僕たちはもうちょっと近づいた。

やはり気づいていないな。

「おい白瀬・」

「ああ、あの二人絶対にエッチしてるぜ」

「あ、向こう向いた！」

向こうを向いた瞬間に男の手が女の胸のほうに行っただぞ！

「くそう、カメラもつてくりやよかった。」

「いやいやいや、盗撮はダメだろが」

でも……この二人、よくこんなとこでやるよな。

ホテルとかでやればいいのに。

「んっ……んあっ……!!」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「聞こえたか霧生」

「ああ聞こえたとも」

「今ので数人気がついたな」

「ああ、どうする白瀬、そろそろ帰るか？」

「いやあ……これは見ものだろ。まだまだ見物するぜ……！」

その後しばらく、彼らの周りは波が激しく立っていた。



21 普通の冬休み 一線を越えるとき (エロ注意) (前書き)

耕也「こんのやろうがあ」

晃平「いきなりなんだよお前は」

耕也「羨ましいってんだよこのやろう」

晃平「お前そればっか」

耕也「くっそー・・・いつのまにかあんなに進展しやがって・・・

こっちなんか、全然だつてのに・・・」

晃平「何の話してんだコイツ・・・？」

## 21 普通の冬休み 一線を越えるとき (エロ注意)

無事家へ帰りついた僕は、とりあえずソファでぐったりとしていた。

「あー、今日は無駄に疲れたああ・・・」  
白瀬のヤロー・・・結局バレちまいやがって・・・。  
・・・まあでも、めっちゃ怒られてたからいいとするか。スッキリした。

「・・・そういや冬休みなのに、みなみとまったく会ってなかったな」

『宿題ならもうやっちゃったよ』  
「え、お前も!？」

電話の相手は鮎川みなみ、僕の彼女だ。  
ていうか、みんな宿題やってんのか・・・。

『でね、またみんなでどこか行こつて話になったんだ』

「なるほど、で、どこ行くんた？」

『うーん、まあ旅行かな？』

「旅行？」

『旅行って言っても、ちょっと離れた旅館で何かするとか、そんなんだよ』

「ふうん、じゃやるか。いつ行くんだ？」

『えっと・・・一応明後日の予定』

「近くね！？　まあいいけど・・・よし白瀬と夏菜にも言っておくよ」

『ホント？ありがとうね。じゃあバイバイ』

「おう」

ガチャ

・・・旅行か。

つつつても、旅館か何かに泊まるだけだろうけどさ。

まあいいか、楽しくなりそうだ。

・・・さて、明日何をしてすごすか、それが問題だ。

～翌日～

僕が朝起きて、リビングへ向かうと

「あ、こんにちは」

「やっとう起きた」

美保がいた。

「ええ！？ 何で美保・・・ちゃんがいんの！？」

「いやいや、もう12時半だからお兄ちゃん」

「え、そうなの？」

マジか・・・正確には12時28分・・・、もうこんな時間だったとは・・・。

・・・んなことはどうでもいい。

美保がいるってことがとても問題だ！！

相変わらずミニスカ穿きやがって・・・！

「とりあえず、私買い物行ってくるから、留守番よろしくね」

「いや、ちょ待てっ・・・」

ボタン

アノヤロウ・・・ここまで来ると

ワザとじゃねえかって疑ってくるぜ・・・！

客を呼んどいて買い物に行くアホはいないからな・・・。

「あの・・・」

「え・・・？」

とりあえずその脚は組まないでもらいたいのだけれど・・・。  
組みなおすたびに見えるから・・・。

「この前のことなんですけど・・・」

「えええええ・・・？」

今出すの、その話題を・・・？

「あの・・・この前・・・私のお腹に当たってたのって・・・その・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・今世紀最大級に触れてほしくない話題だ・・・」

「お、男の人のって・・・その・・・みんなああいう風になるんでしょうか・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・まあ、なるんじゃないのか」

「コイツ、めっちゃ興味津々じゃねえか・・・」

「つうか、華音はやくもどってこんかゝあゝあゝ・・・」

「あの・・・それで・・・あの時・・・私のココに・・・その・・・」

「イヤイヤヤア！！！！それについては触れるな！」

「しかもさりげなくスカート捲り上げようとしてんじゃねえよ！」

「目が行くだろ！」

「華音あとで殺す！」

「あ、あれは・・・ワザとじゃないんですよね・・・？」

「当たり前だろ！僕を何だと思ってた・・・！！」

「断じてワザとではない！　が、ちよつとうれしかったのは認める！」

「せんぱいは・・・女の子に興味無いんですか？」

「はひ？」

「興味ないことはないけど・・・一応彼女いるし。」

「何でそう思うんだよ」

「・・・あんなことばかり起きてるのに・・・その、何もしてこないの・・・・・・・・」

「・・・・・・・・え？」

それはつまり、何か？

「何かしてほしいってこと・・・？」

「そ、そうじゃなくてですな・・・えと、

男の人とあんな風に接触したことが無かったので・・・」

「そういう卑猥な表現はやメロ」

つか華音遅い・・・。

いや、実際にはまだ2分ちよつとしか経ってないのかも・・・。

いや、2分ちよつとつて長いのか・・・？

どうでもいいけど、さっき美保がスカートを捲り上げようとしたせいで

服が乱れて、きれいにパンツ見えちゃってるんだよな・・・。

華音マジ殺す。

「あの・・・・・・・・せんぱい、また・・・・・・・・」

「え・・・・・・・・？」

「や、やっぱり・・・そういう形に・・・・・・・・」

「詳しく言っনাア!？」

実は興味津々だな、美保のやつ！

こいつ絶対裏ではエロいぞ!!

「私・・・本物見たこと無いんですよね・・・・・・・・」

「は？」

えと、つまり偽物なら見たことあるってこと？

いや、そういうことじゃないのか。

「せんぱいも・・・実物はみたことないですよ・・・・・・・・？」

「え、何の？」

わかっているけど、僕はあえて聞いた。

「えと・・・ですから・・・その、胸とか・・・」

「そりゃあるわけないだろ」

「・・・そうですか」

・・・・？

「待て待て！？ なぜ今上着を脱いだ！？」

「その・・・」

美保は脚を組むのを止め、スカートに手をかける。

・・・・え？ え？ え？

「何・・・する気・・・だ？」

「その・・・ちよつと・・・興味がある・・・かなって・・・」

・その・・・」

美保はスカートをゆっくりと捲りながら、言った。

21 普通の冬休み 一線を越えるとき (エロ注意) (後書き)

晃平「今回はヤバい気がする」

耕也「ここまできたら羨ましいを通り越してすごく羨ましいわ」

晃平「どこをどう越えた!？」

耕也「まあまあ気にすんなって。

作者は最近微妙な立ち位置らしい」

晃平「心底どうでもいいわぁ・・・」

22 普通の冬休み 一線を越えるトキ (エロ注意) (前書き)

耕也「イナズマイレブンGO発売までもう少しらしい」

晃平「よく知らないけど、面白いのそれ」

耕也「前作、イナズマイレブン3はかなりすごかった。

今作の化身システムに期待が高まる・・・by作者」

晃平「何で作者自分で喋らないんだ？」

耕也「最近いやなことがあったんだと」

晃平「へえ」

## 22 普通の冬休み 一線を越えるトキ (エロ注意)

今、僕はとんでもない状況下に立たされていた。

妹の友人に誘惑されるという、現実味の無い状況・・・  
これぞ非日常だ。

・・・とか言ってる場合ではない・・・。

「えと・・・興味がある・・・って・・・？」

「その・・・え、エッチなことか・・・です・・・」

「えー・・・っと・・・」

これは回答に困る・・・。

興味が無いと言えばウソだが、僕には彼女がいる・・・。

とか考えていると美保は、綺麗な脚をソファアの上に寄せ、  
いわゆるM字開脚というものに近い状態となった。

・・・こ、こいつ・・・マジだ。

これ本気なノリだ・・・。

僕も実はちよつとヤバイ・・・かも・・・。

「……ちょっと、湿ってるし……。  
ぜび白瀬と代わってやりたい気分だ……。」

「ちょっと……来てもらってもいいですか……?」

「え……いや、でも……なあ……。」

「お願いします……。」

「……。」

頼むからそんな目で見ないでくれ……。

どうしようもないだろ……。

つか、どうするんだ……。

華音が帰ってこないと逃げられないが、

今帰ってこられると状況的に困る……。

どうすれば……。

とか考えつつも、美保の側に行く。

「……ほい、来たぞ」

「……その……興味があるんなら……。その  
の……。」

「……どうぞ……。」

「……え?」

「さ……触ってみて……ください……。」

「……ええええええ……!？」

い、今、この状況で!?

コイツ今とんでもないこと言っただよな!?

ど……うする……。

よくよく考えたら、今家には誰もいない……。

でも僕には彼女がいるし……でも……。

そう考えているうちに僕の手は動いていた。

右の人差し指で、ゆつくりと美保の．．．アソコに触ってみた。

「んっ．．．．」

「．．．．．」

やっちまった．．．。

これだけはやるまいと思っていたのに。

いや、この状況で誘惑されたら仕方あるまい、うん．．．。

「初めて．．です．．男の人に触られたの．．．．」

「いや、僕も触るのは初めてだけでも．．．．」

つか、今の発言って、女の人には触られたことあるってこと．．．？

「あの．．．濡れて．．ましたか．．．？」

「．．．うん．．．まあ」

自分で聞いという顔赤らめるなよ。

僕だって恥ずかしいのに．．．．。

その後も何度か指でゆつくりと撫でた。

撫でるたび美保が声を上げる。

これ．．．誰かに見られたら終わりだな．．。

「せんぱい．．．．なんか．．．熱くなってきました．．．．」

「え．．．いや、おい．．．．」

上の服まで脱ぎ始めたぞ．．．。

これ．．．まさかコイツ本番まで持ちこむ気じゃ．．．。

いや、さすがに本番はできないよ！？

さすがにそれは彼女じゃないとダメだろ！

みなみにそんな気があるのかは分からないけど！

美保は上の服のボタンをはずし、下着に包まれた胸を見せる。

・・・やっぱり、それなりに・・・胸はあるんだな・・・。

「よかつたら・・・胸もどうぞ・・・せんぱい」

「えと・・・じゃ・・・」

よかつたらって言ってるけど、状況的に

これは『触れ』って言ってるようなもんだよな・・・。

なので・・・下着の上から胸を触った。

・・・結構柔らかいな・・・。

「あ・・・せんぱい・・・んっ・・・」

しかしなぜ美保は急にやる気になったんだ・・・？

それだけが疑問だ。

・・・まさかこの前のアレでその気になったんじゃ・・・。

「・・・ハア・・・せんぱい・・・その・・・」

「え・・・？ 何だ・・・？」

そろそろやめといたほうがよろしいかと・・・。

華音も帰ってきそうだし・・・。

「その・・・せんぱいのも・・・触って・・・みたいですよ・・・」

「」

「・・・え・・・！？」

・・・いやいやいや、それはさすがに・・・いかにでしょ・・・。

「いや・・・や、やめといたほうがいいと思うけど・・・」

「じゃ、じゃあ・・・見るだけ・・・で・・・」

見るだけ・・・って・・・。

それでも結構問題だろ・・・。

つかそんなことできません。

「私のは・・・触ったのに・・・」

「ヴッ・・・」

それ言われると・・・。

つかそのために触らせたな・・・？

「な、何なら・・・もつと触ってもいいですから・・・

その・・・見る・・・だけでも・・・」

「で・・・もなあ・・・」

「・・・わ、分かりました・・・。な、なら・・・」

美保はなぜか立ち上がった。

すると・・・。

「じゃ、じゃあ・・・私のも・・・生で・・・見せますから・・・

・・・」

「え・・・!!!!!!??」

美保は立ち上がるや否や、下着を降ろしたのだ・・・。

「ええええええええ!!」

「じゃ、じゃあ・・・見せます・・・よ・・・」

「いやいやいやいや!早まるな、待て!

とりあえず、これ以上はやめよう!な!」

「せ、せんぱいが見せてくれたら・・・やめます・・・」

「く・・・」

コイツ、最初よりやる気になってないか・・・？

「な、なら・・・胸も・・・」

「わ、分かった!!分かったからこれ以上脱ぐな!」

「じゃ、じゃあ・・・見せてください・・・せんぱいの・・・」

「・・・仕方ない・・・な・・・」

[illegible]

「……………すごいですね、せんぱいの……………」

「ああああ……死にたい……」

「せんぱいの……見てるだけで興奮できました……」

「もう分かったからこれ以上トドメをささないで……」

「でも、せんぱい……?」

「・・・まだ何かあるのか・・・」

「今、ちようど……お互い脱いでますよね……？」

「え？」

「その……」

せんぱいのが……欲しいです……」

「イヤイヤイヤ……それは無理だろ！やめといたほうがいい！」

「!」

「そうですか．．．？ 私だけいい気持ちになってずるいなと思  
ったので．．．」

「．．．．．あ、じゃあ．．．」

「も、もういいよ！見せただろ、もうとりあえずやめとこつ！」

「じゃ、じゃあ最後に．．．もう一度．．．触ってください．．．  
」

「もう一度言っ、もういいだろ!？」

そのときであつた。

ガチャ

「え!？」

「あ．．．」

ヤベ、華音かえつて来たぞ！

この状況．．．どうする．．．!？」

「せんぱい．．．もつと．．．」

「いやいやいや、華音帰ってきたし!とりあえずこの状況!」

「じゃあ．．．とりあえず、せんぱいは私の隣に座って．．

それで服を着ましょう．．．」

「あ、あれはどうすんだ．．．?」

僕は放りっぱなしになっている美保の下着を指差した。

「えと．．」

「とりあえず．．．隠す!」

カチャ

「ヤッホー、ただいま」

「お、おかえり・・・」

「遅かったね、華音」

「まあね」

・・・。

ウチの妹はバカなので、

少々おかしくても気づかないのである。

でも、問題点が少々・・・。

まず美保が今、ノーパンなこと。

そして美保のパンツは僕の下にあること。

とつさに思いついた隠し場所・・・場所ではないけど、  
とりあえず、下着の上に僕が座って隠した感じた・・・。

「じゃ美保、上行こうよ」

「うん」

「え、ちょ、え・・・？」

下着どうすんの・・・？

「じゃお兄ちゃん、私たち上にいるから」

「失礼します、せんぱい」

カチャ

・・・ええええええええ？

美保のパンツ・・・どうすんの・・・？

・・・とりあえず、宿題しよう・・・。

～で～

「お兄ちゃん、美保帰ったから上行ってもいいよ」

「・・・は！？ 帰ったの！？」

「うん・・・何でそんなに驚いてんの？」

「いや・・・別に・・・。」

「・・・え、じゃあアイツ、ノーパンで帰ったってこと・・・？

下着は僕の下にあるし・・・。。。

・・・。。。。。

～部屋～

「このパンツどうするんだ・・・？」

結局部屋へ持ち込んだわけだが・・・。。。。。

とりあえず、僕はそれを鼻に近づけてみた。

〽翌日〽

「ふおお．．．あ、そいや今日だったな．．．  
出かけるの．．．」

さて、準備するか．．．。

全然眠れなかったけどな．．．。

22 普通の冬休み 一線を越えるトキ (エロ注意) (後書き)

耕也「お前羨ましすぎんぞ!？」

晃平「ええええ・・・そんなこと言われても」

耕也「こうなったら。俺も作者に交渉する!」

晃平「いや無理でしょ。あの作者、今は口利けないよ多分」

耕也「マジだりいよなああの作者」

晃平「ちよつとヒドいんじゃない・・・?」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5003q/>

---

ごく普通の高校生の普通な非日常

2011年12月3日19時56分発行